

個人住宅建築に係る
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告

富山県婦中町
南部Ⅰ遺跡発掘調査報告

1998年3月

婦中町教育委員会

序

神通川・井田川・山田川の豊富な水と呉羽丘陵の縁に囲まれた婦中町は、古来から人々にとって住み心地の良い環境の町であったようです。古くから呉羽丘陵づたいに数多くの遺跡が確認されており、最近では、県営公告防除特別土地改良事業や県営担い手育成基盤整備事業で新たな遺跡が確認されています。この度、個人住宅建築に先立ち調査致しました南部Ⅰ遺跡も基盤整備事業で新たに確認された遺跡であります。

調査では弥生時代終末期の堅穴住居跡や大溝跡が確認されるとともに、弥生土器が数多く発見されました。基盤整備事業に伴う周辺の試掘調査でも同時期の遺構・遺物が確認されており、一帯の微高地には弥生時代終末期の集落が営まれていたと思われます。発掘調査で得られた資料は県内の古墳出現期の土器様相を知る上で貴重な資料になるものと思われます。

今後、基盤整備事業の進行に伴う調査で、先住民の生活の様子が明らかにされていくものと大きな期待を寄せているところです。

本書が私達の祖先や郷土の歴史を知る良い資料となることを期待するとともに、発掘調査に際して格段の御協力頂きました地権者の方並びに地元の皆様、関係各位に深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬ御支援を賜りますようお願い致しましてあいさつといたします。

平成10年3月

婦中町教育委員会

教育長 宮島 信一

例　　言

1 本書は、富山県婦負郡婦中町熊野道地内に所在する南部Ⅰ遺跡の埋蔵文化財調査報告である。

2 調査期間・面積は次の通りである。

　調査期間 平成9年5月11日～平成9年8月11日（延べ48日間）

　調査面積 410m²

3 調査体制は以下の通りである。

　調査担当者 婦中町教育委員会 生涯学習課 文化財保護主事 畠内大介

　嘱託 勾坂友秋

　調査事務局 婦中町教育委員会 生涯学習課 課長 鍋山 徹

　文化振興係長 山田茂信

　作業員・仮設調査事務所敷地の確保については、婦中町シルバー人材センター・（有）小沢建築の協力を得た。

　座標軸の設定については、（株）新栄測量設計の協力を得た。記して謝意を表したい。

4 資料の整理、本書の編集と執筆は、調査担当者がこれに当たった。

5 現地調査及び資料整理期間中、下記の機関、個人から御教示・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略、50音順）

富山県埋蔵文化財センター、城端町教育委員会、宇野隆大、越前慶祐、大平奈央子、河合忍、久々忠義、

島田修一、高梨清志、宮崎順一郎

6 本書の挿図・写真図版の表示は次の通りである。

　方位は真北、水平基準は海拔高である。

　遺構の表記は次の記号を用いた。堅穴住居：S I、溝：S D、土坑：S K、ピット：S P

7 出土品及び記録資料は婦中町教育委員会が保管している。

8 整理作業参加者は次の通りである。

　中坪千春、生出寿美子（整理作業員）、河西英津子・小島あづさ、近藤美紀、勾坂友秋（整理補助員）

本　文　目　次

序 文	2 遺構	3
例 言	3 遺物	4
目 次	IV まとめ	23
I 遺跡の位置と環境	1 遺構	23
II 調査の経緯と経過	2 遺物	23
1 調査に至る経緯	3 結び	26
2 調査の経緯と方法		
3 座標軸の設定	参考文献	
III 調査の概要	写真図版	
1 基本層序	報告書抄録	

挿 図 目 次

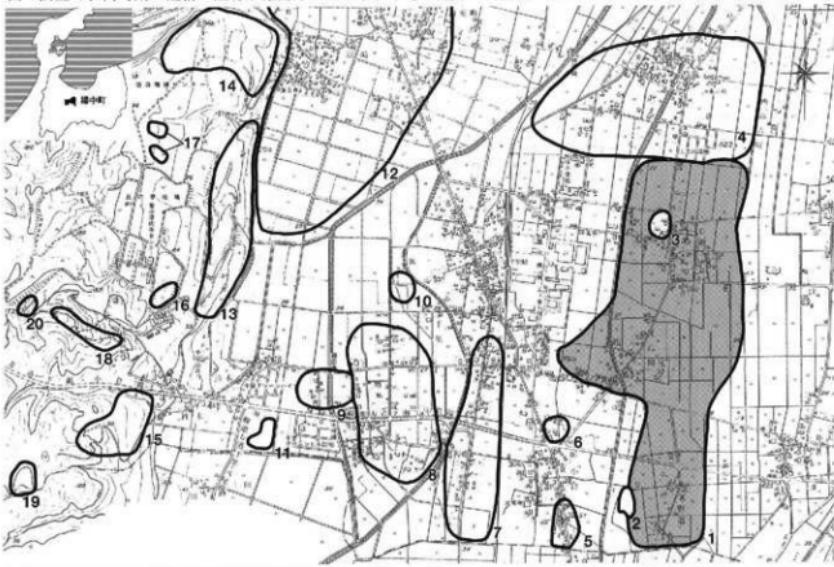
第1図 周辺の遺跡分布図と遺跡一覧	第10図 出土遺物実測図
第2図 調査対象範囲と区割図	第11図 出土遺物実測図
第3図 基本層位模式図	第12図 出土遺物実測図
第4図 遺構配図及び北壁・東壁・遺構断面図	第13図 壺形土器・壺形土器の分類
第5図 S I 01平面図・断面図	第14図 鉢形土器・高杯形土器・器台形土器・壺形
第6図 S I 01:1器出土状況図及びP i t 平面図・断面図	土器等の分類
第7図 S D 02土器出土状況図及びP i t 平面図・断面図	第15図 壺形土器の口縁部形態別構成比率
第8図 出土遺物実測図	
第9図 出土遺物実測図	第1表 土器観察表（弥生土器）

I 遺跡の位置と環境

南部I遺跡は富山県婦負郡婦中町熊野道・上井沢・島田・高日附地内に所在する。婦中町は富山県の中央部に位置し、北は県都富山市に隣接している。町の地形は、概ね西側の丘陵部と東側の平野部に大別される。丘陵部は県中央部を南北に横断する吳羽丘陵の南方に連なり、山田川によって二分されている。一方、平野部は神通川と井田川が形成した扇状地が広がり、富山平野へと続いている。南部I遺跡は井田川左岸扇状地の微高地に立地し、標高約30mを測る。現在は、水田・畑地に利用されている。

南部I遺跡の周辺には、各時代の遺跡が数多く存在している。主な遺跡として、千坊山遺跡（旧石器・縄文・弥生・平安・中世・近世）、富崎城跡（縄文・弥生・中世）、王塚古墳・勅使塚古墳・富崎千里古墳群・千里C遺跡（古墳）などがある。中世に入ると遺跡の西に位置する富崎山に神保氏の拠点の1つであった富崎城跡を中心とする森田山砦・下瀬堀・大館城跡などの富崎城邑群が築かれ、富崎山東方の平野部には、千里E遺跡・小倉中稻遺跡などの集落が形成される。のことから、当遺跡周辺は軍事上・交通上重要な位置を占めていたと思われる。また、富崎城跡には弥生時代終末期に属する約30mの規模を持つ四隅突出型埴丘墓（富崎1号墓）【古川1994】がある。

また、南部I遺跡は八尾町境に位置する遺跡であり、八尾町では翠尾I遺跡と呼称が変わる。翠尾I遺跡では平成8年度に本調査が行われており、その結果、弥生時代終末期の集落跡が検出されている【中村・岩崎ほか1997】。今回の調査で、同時期の遺構・遺物が確認されており、翠尾I遺跡との関連が窺われる。



No.	遺跡名	特	代	7	千里東垂葦跡	古代・中世・近世	14	富崎城跡	西・南・北	中世
1	唐船I遺跡	弥生・古墳・古代・中世・近世	代	8	千里B遺跡	古墳・古代・中世・近世	15	大館城跡	中	後
2	小倉中稻河原遺跡	古墳・古代・中世	中世	9	千里B遺跡	古代・中世・近世	16	三片坂塚跡	不	新
3	高木前遺跡	孫・古	古	10	千里A遺跡	古	17	富崎南野寺跡	西・南	古代・中世
4	上古田I遺跡	孫・古	古	11	千里C遺跡	古・城・古代・中世	18	シダイト塚	中	後
5	小倉中稻河原遺跡	古代・中世・近世	中世	12	富崎遺跡	弥生・古墳・古代・中世・近世	19	富崎馬場塚跡	中	後
6	小倉中稻河原遺跡	中	古	13	波崎千三古墳群	古	20	井田臼井	中	後

第1図 周辺の遺跡分布図及び一覧 (1/20,000)

II 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯

平成6年から平成9年にかけて、県営担い手育成基盤整備事業に伴い、町教育委員会は、県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受けて、事業計画地内で分布調査を行った。その結果から婦中町熊野道・上井沢・島田・高日附地内に南部I遺跡を設定した。

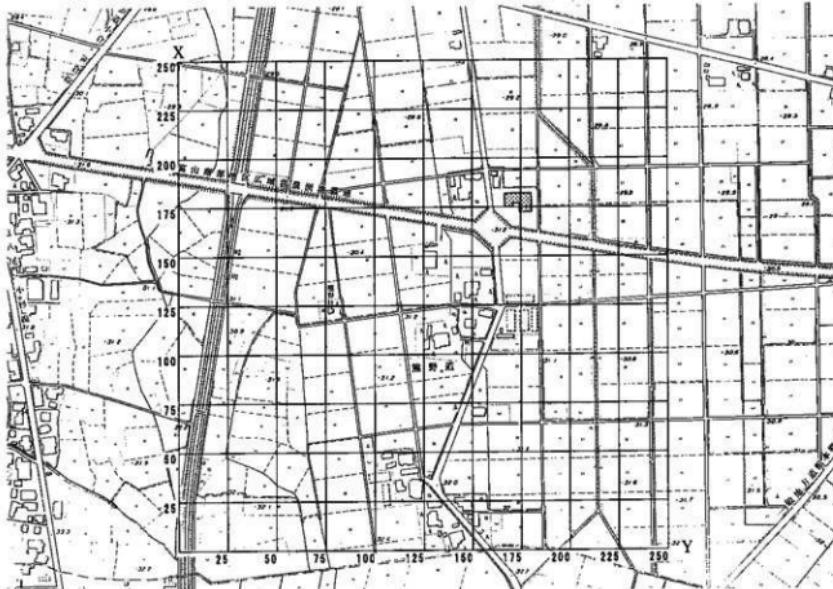
今回の調査地については、平成8年度に個人住宅建築に伴う農業振興地域整備除外申請が提出され、これを受け、町教育委員会では申請地が南部I遺跡内であるため、事前調査が必要である旨を申請者に通知し、同年12月に1,568m²を対象に試掘調査を行った。調査の結果、弥生時代終末期の大溝が検出され、遺物は弥生土器、中世土器類が出土した。申請地に南部I遺跡の遺存を確認したため、申請者との協議の結果建物部分約410m²について平成9年5月から本調査を行うこととなった。

2 調査の経緯と方法

まずは試掘調査の結果をもとに重機による表土掘削を行った後、人力により遺構の検出と掘削を行い、引き続き、図化・記録作業に入った。調査期間は平成9年5月11日～8月11日であった。

3 座標軸の設定

国土地理院設定、第7座標系公共座標のうち、X=68,900・Y=-2,400の点を0原点として設定した。なお、座標軸のX軸は真北である。

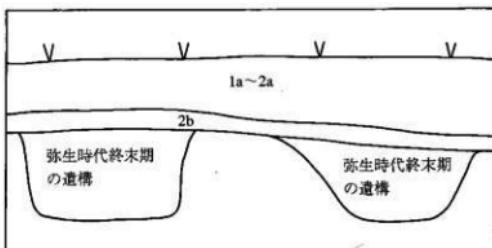


第2図 調査対象範囲と区割図 (1/5,000)

III 調査の概要

1 基本層序

基本層序は、第1a層：黄灰色土（表土）、第1b～1h層：盛土・旧耕作土・床土の互層、第2a層：黒褐色シルト、第2b層（弥生遺物包含層）、第3a層：にい黄色粘質シルト（地山）である。遺構は地山面に検出された。地山までの深さは地表から約30～60cmを測り、北東に向かって地山が傾斜する。



第3図 基本層位模式図

2 遺構

検出した遺構は、竪穴住居1棟、溝3条、土坑、ピット等である。

竪穴住居

S I 01 調査区北西隅にある。規模及び形態は西側が調査区外にあるため不明であるが、形態は円形と思われる。確認された規模は直径約8.4m、床面積は45m²以上を測る。検出面からの深さは約70cm、床面はほぼ平坦である。検出した主柱穴は4、径は28～70cm、深さ22～50cm、主柱間距離は3.2～3.6mを測り、主軸方位N-19°-Eをとる。主柱穴4本のほぼ中央には、径40cm、深さ30cmを測る円形の土坑がある。覆土は殆ど炭塊のような黒色粘質シルトで、土坑の西側には焼土や炭化物の広がりが床面で確認でき、炉と考えられる。また、中央東壁よりには、径70cm、深さ26～32cmを測る円形の土坑が2基（S K01・02）あり、屋内貯蔵穴と考えられる。土器は、④層に多く出土した。調査時に断面観察用のサブトレレンチを東西・南北に設定し、取り上げの際にこのサブトレレンチを基準に4つの群に分割して土器の取り上げを行った。北西部をI群（No1～23）、南西部をII群（No24～76）、南東部をIII群（No77～103）、北東部をIV群とした。出土した土器の時期は弥生時代終末期に属する。

溝

S D 01 調査区東南隅にあり、主軸方位N-36°-Eをとる。規模は幅4.8m以上、深さ36cmを測る。断面形は東側肩部が調査区外のため不明であるが、西側肩部は緩やかな角度を持って立ち上がる。また、断面観察から自然河川であると考えられる。出土土器には実測に耐えるものがなかった。

S D 02 調査区中央で確認された大溝である。調査区南壁から主軸方位N-53°-Eをとり、調査区中央で屈曲し、主軸方位N-12°-Eをとる。規模は幅10m、深さ60cmを測る。断面形は西側肩部が緩やかに、東側肩部がやや急な立ち上がりを持つ。断面観察から人為的掘削は受けておらず自然河川の様相が強い。土器は全体に散在しているが、特に⑤層の東側肩部に数ヵ所集中して出土した。取り上げの際に8つの群に分割して土器の取り上げを行った。出土した土器の時期は弥生時代終末期から古墳時代初期に属する。

S D 03 調査区中央にあり、主軸方位N-86°-Wをとる。規模は検出長5.2m、幅30cm、深さ12～32cmを測る。S D02が埋没する前にあった。出土した土器は弥生時代終末期から古墳時代初期に属する。

土坑

S K 03 調査区中央に位置する椭円形の土坑である。長軸88cm、短軸60cm、深さ20cmを測る。

3 遺物

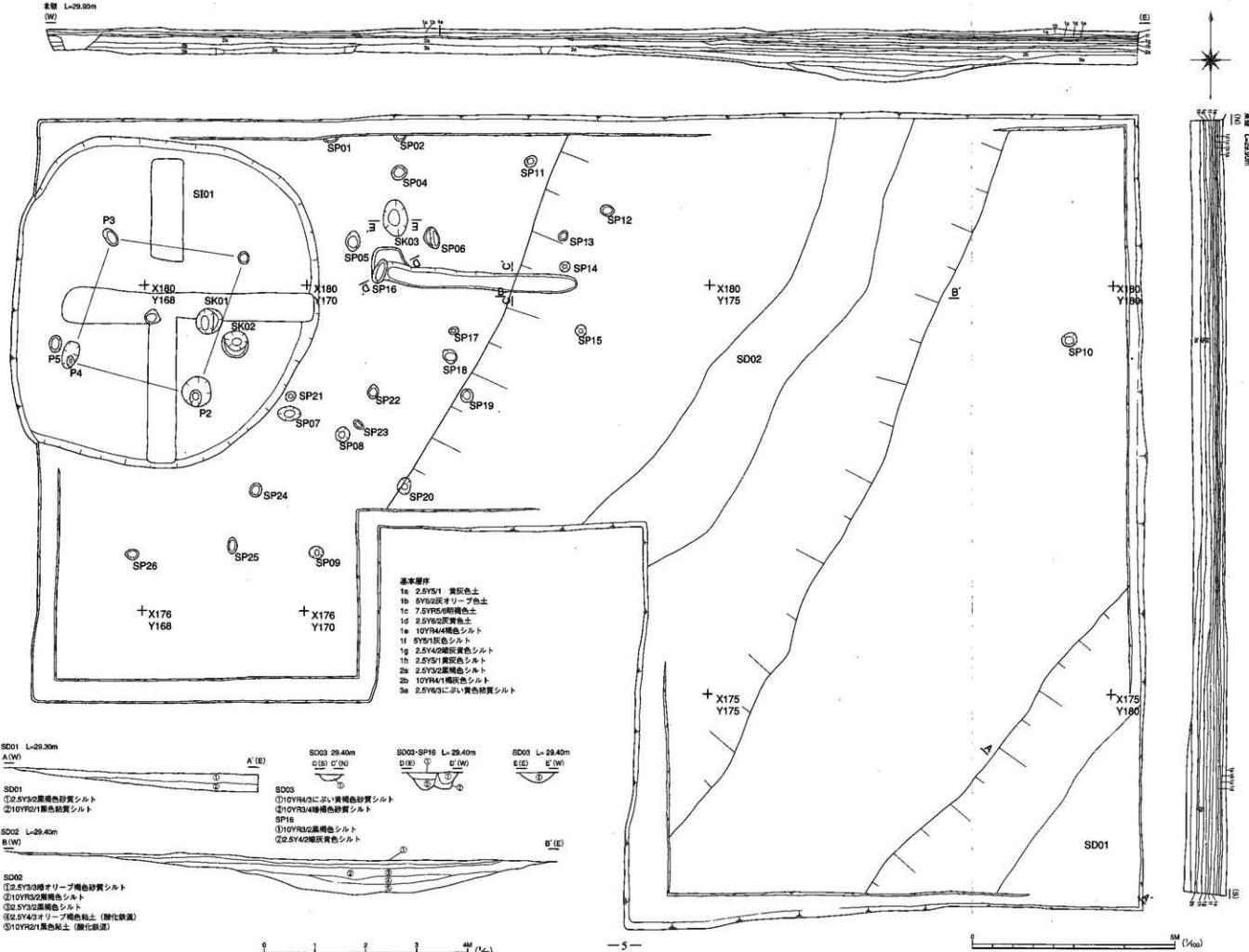
S I 01

I 群（第8図1～19）

1～8は壺である。1～3は有段有文口縁壺である。1は口縁帯に4条の擬凹線文を施す。口縁部は斜め上方に弱く外反しながら立ち上がる。口縁下部がやや突出する。内面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。2は口縁帯に7条の擬凹線文を施す。口縁部がほぼ直立し、口縁端部は丸く納める。口縁部内面の中央はやや膨らみ、端部に向かって弱く外反する。口縁部内面にはナデ調整を行なう。外面に煤が付着する。3は口縁帯に12条の擬凹線文を施す。口縁部がほぼ直立し、口縁端部は丸く納める。口縁部内面の中央はやや膨らみ、端部に向かって弱く外反する。内面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行なう。4～6は有段無文口縁壺である。4は口縁部が斜め上方に弱く外反しながら立ち上がる。口縁下部がやや突出する。口縁部内外面ともナデ調整を行なう。5は口縁部が直立気味に外反しながら立ち上がる。口縁下部がやや突出する。内外面とも摩耗が著しいため、調整は確認することはできなかった。6は口縁部が直立気味に外反しながら立ち上がる。口縁下部がやや突出する。内外面とも摩耗が著しいため、調査は確認することはできなかった。7・8はくの字口縁壺である。7は口縁部が外反し、口縁端部に面取りを行い、上端を擒み上げる。明瞭に作り出した口縁端部に3条の擬凹線文を施す。内外面ともナデ調整を行なう。外面に煤が付着する。8は口縁部が外反し、口縁端部に面取りを行う。口縁部内外面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行なう。外面全体に煤が付着する。9は壺か蓋の底部である。内面にはハケ後ミガキ調整、外面にはミガキ調整を行なう。内外面に煤が付着する。10～12は壺である。10は有段口縁を持ち、口縁部が外反する。口縁部内外面ともナデ調整を行なう。11は短頸広口壺である。口頭部内外面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行なう。12は小型の無頭壺である。球形に近い胴部を持ち、そのまま口縁部が内側にすばまる。内面にはナデ調整、外面にはハケ調整を行なう。13～15は碗形鉢である。13は円盤状の底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部がやや尖る。内外面とも摩耗が著しいが、ミガキ調整が確認できる。14は円盤状の底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。内外面ともミガキ調整を行なう。15は平底の底部から内湾気味に開く脚部を持ち、口縁部が直立気味に立ち上がる。内外面とも摩耗が著しいため、調査は確認することはできなかった。16は高杯の脚部である。脚部が瓶部で強く屈曲して外反する。内外面ともミガキ調整が確認できる。外面・杯部内面に赤彩を施す。17・18は器台である。17は口縁部が外反し、口縁下部を少し垂下させている。受部上半と下半の境に明瞭な段を持つ。内外面とも摩耗が著しいが、ミガキ調整が確認できる。18は口縁部が外反し、口縁端部に面取りを行う。受部上半と下半の境に段を有する。脚部は柱状を呈し、脚裾部は緩やかに外反する。受部内面・脚部外面は摩耗が著しいが、ハケ後ミガキ調整が確認できる。脚部内面にはハケ調整を行なう。外面に赤彩を施す。19は蓋である。八の字状に開く笠部を持ち、口縁端部が尖る。内外面とも摩耗が著しいため、調査は確認することはできなかった。

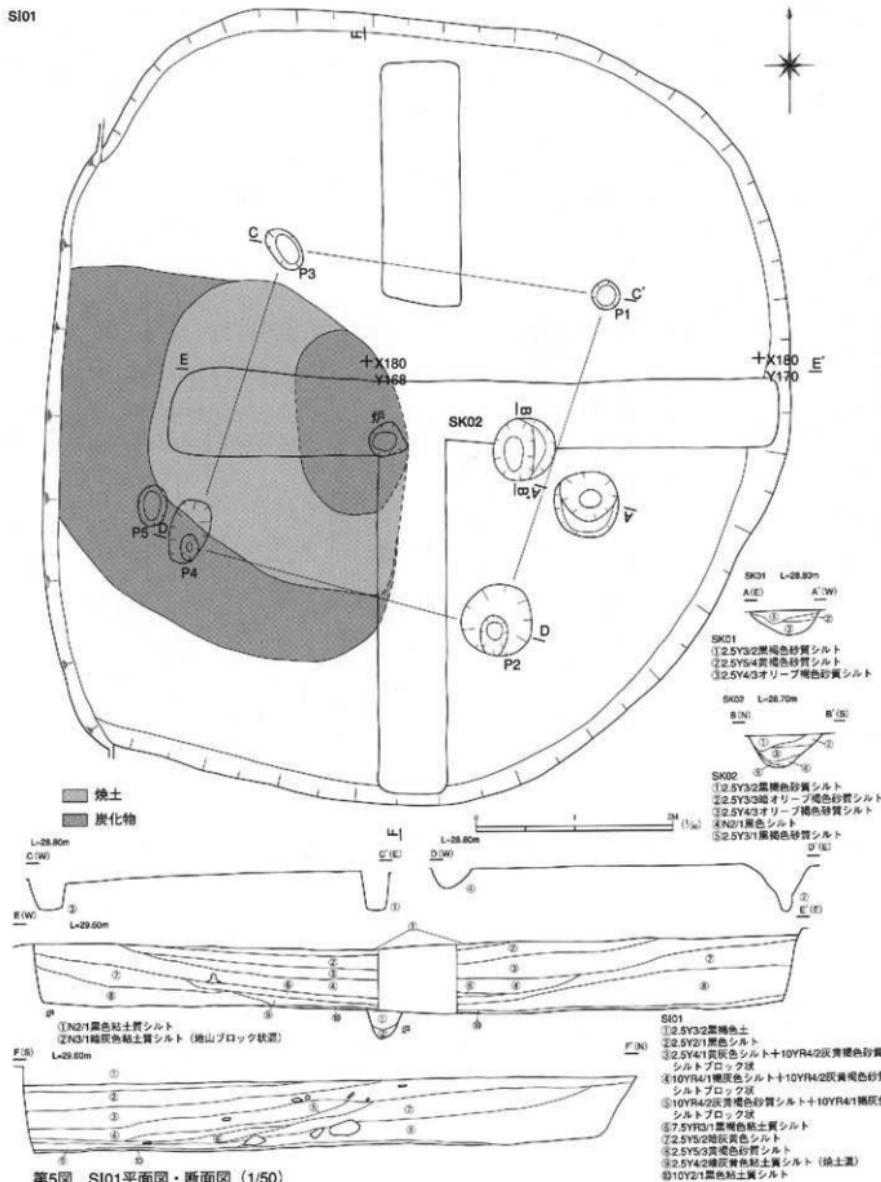
II 群（第8・9図20～41）

20～30は壺である。20～23は有段有文口縁壺である。20は口縁帯に5条の擬凹線文を施す。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。内外面ともナデ調整を行なう。外面全体に煤が付着する。21は口縁帯に5条の擬凹線文を施す。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。内面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行なう。22は口縁帯に6条の擬凹線文を施す。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。内外面ともナデ調整を行なう。外面全体に煤が付着する。23は口縁帯に4条の擬凹線文を施す。口縁部が外反しながら立ち上がり、口縁端部が尖る。内外面ともナデ調整を行なう。外面全体に煤が付着する。24～26は有段無文口縁壺である。24は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く納める。内外面とも摩耗が著しいため、調査は確認できなかった。25は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上



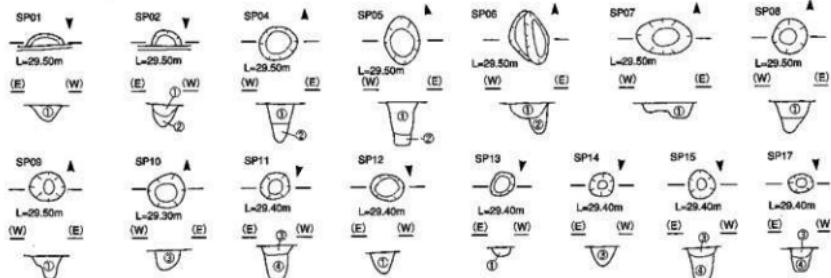
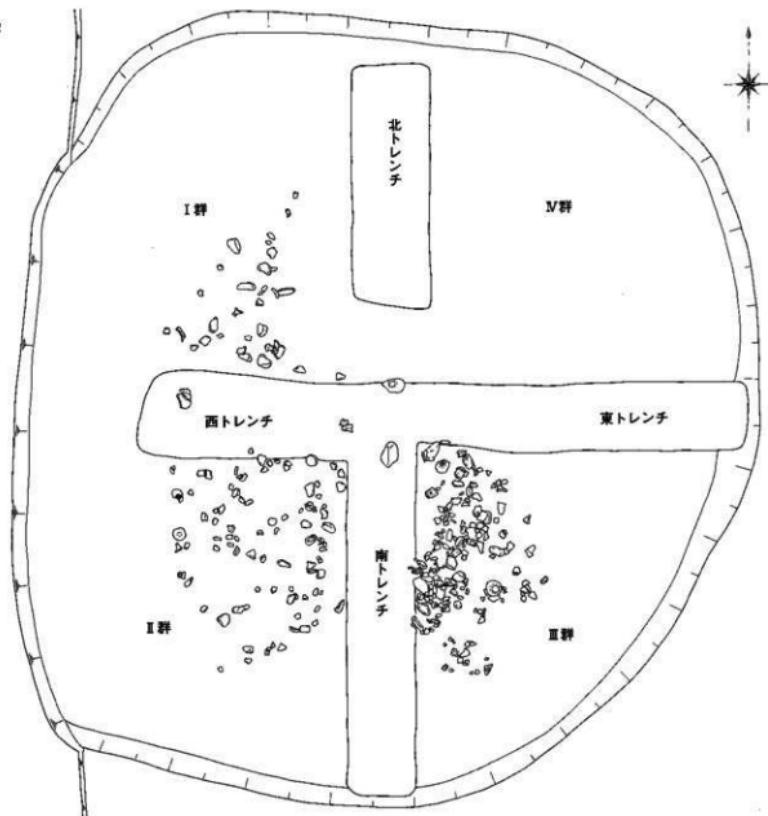
第4図 造積配層図(1/100)及び北壁・東壁・造積断面図(1/80)

SI01



第5図 SI01平面図・断面図 (1/50)

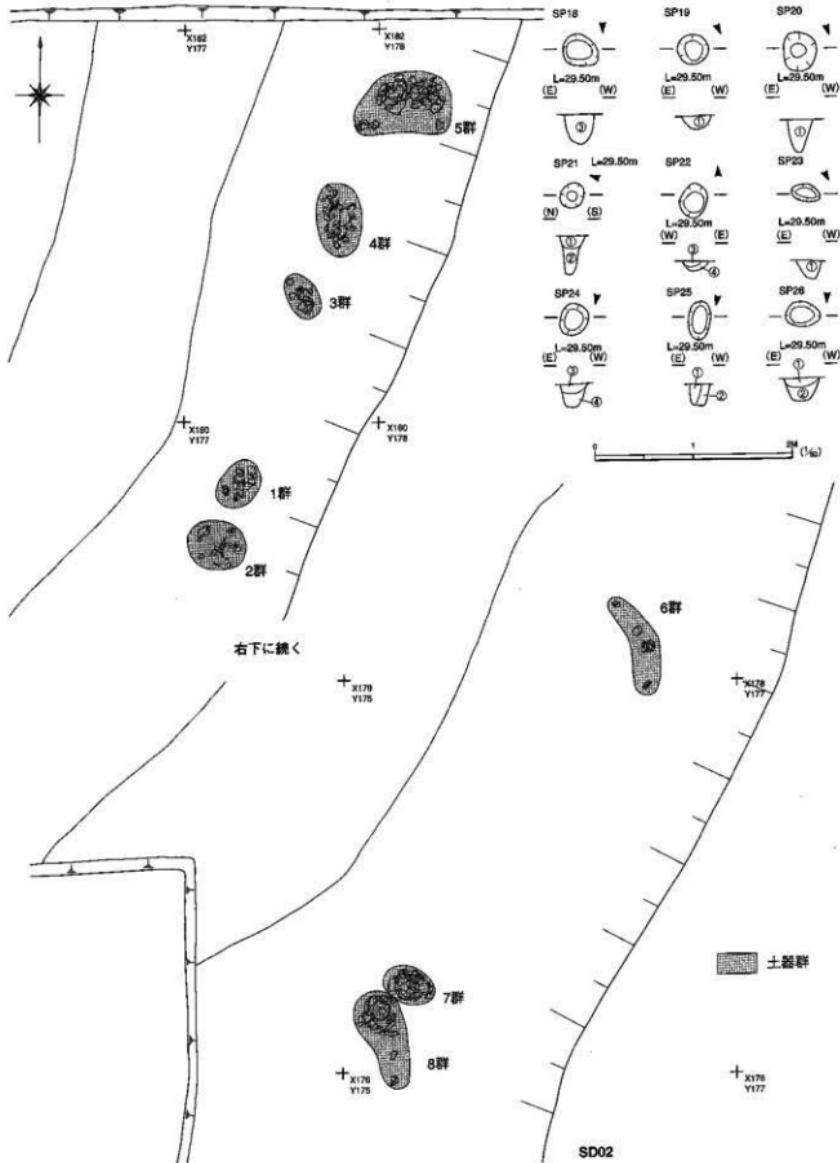
SI02



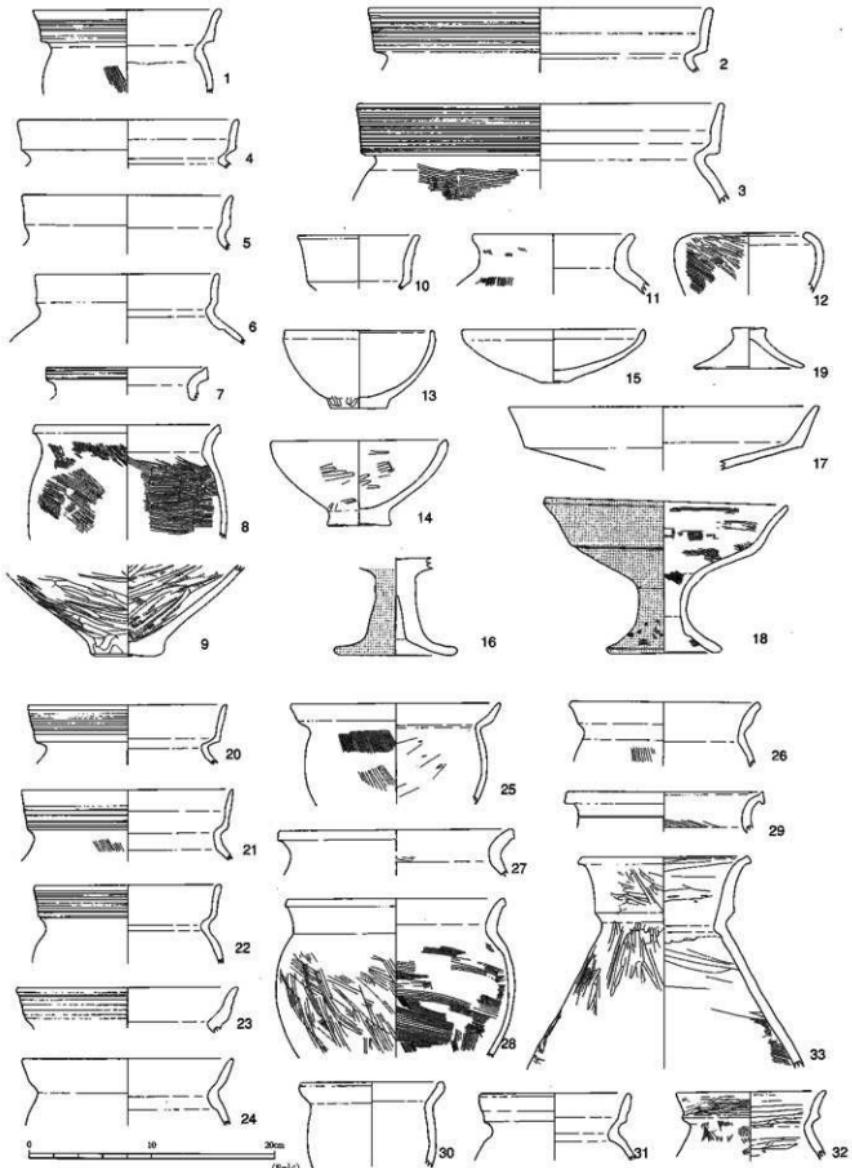
剖面
 ①10YR3/2黒褐色砂質シルト ②10YR3/3暗褐色砂質シルト
 ③10YR2/2黒褐色シルト ④10YR3/4暗褐色シルト

第6図 SI01土器出土状況図及びPit平面図・断面図 (1/50)

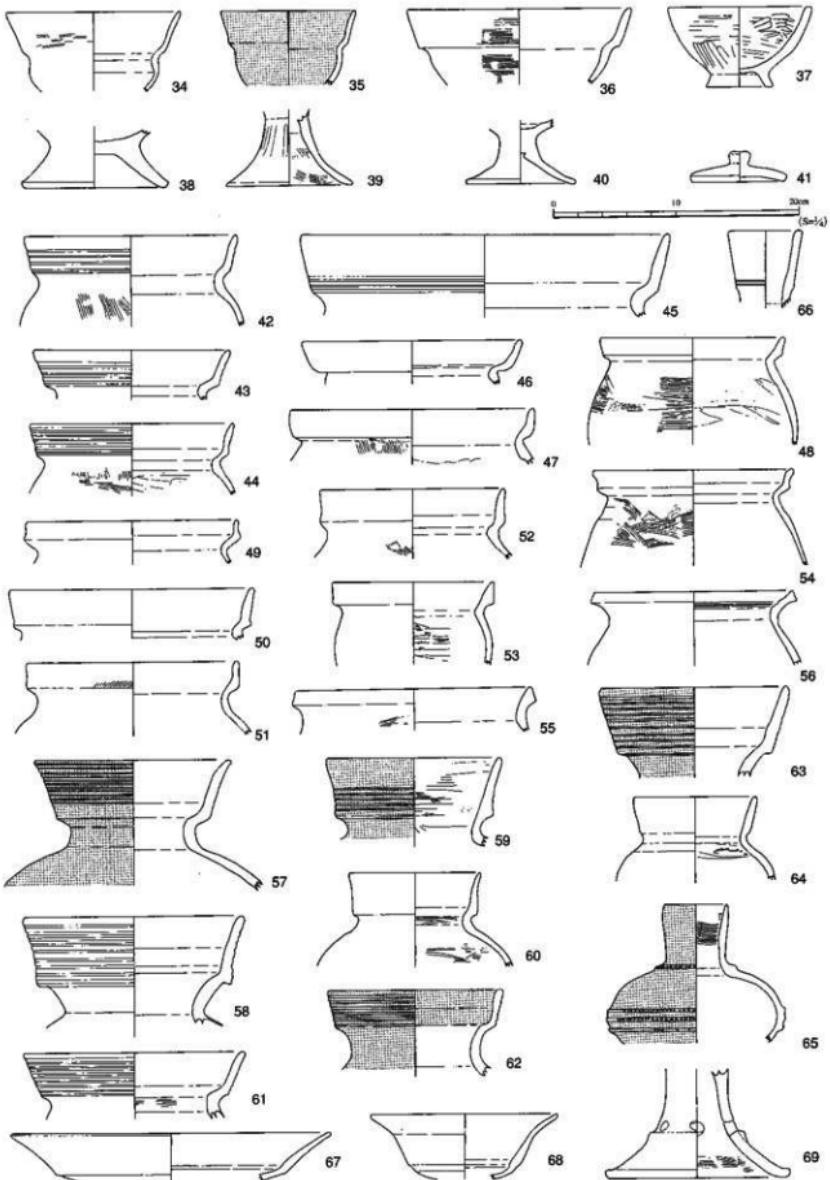




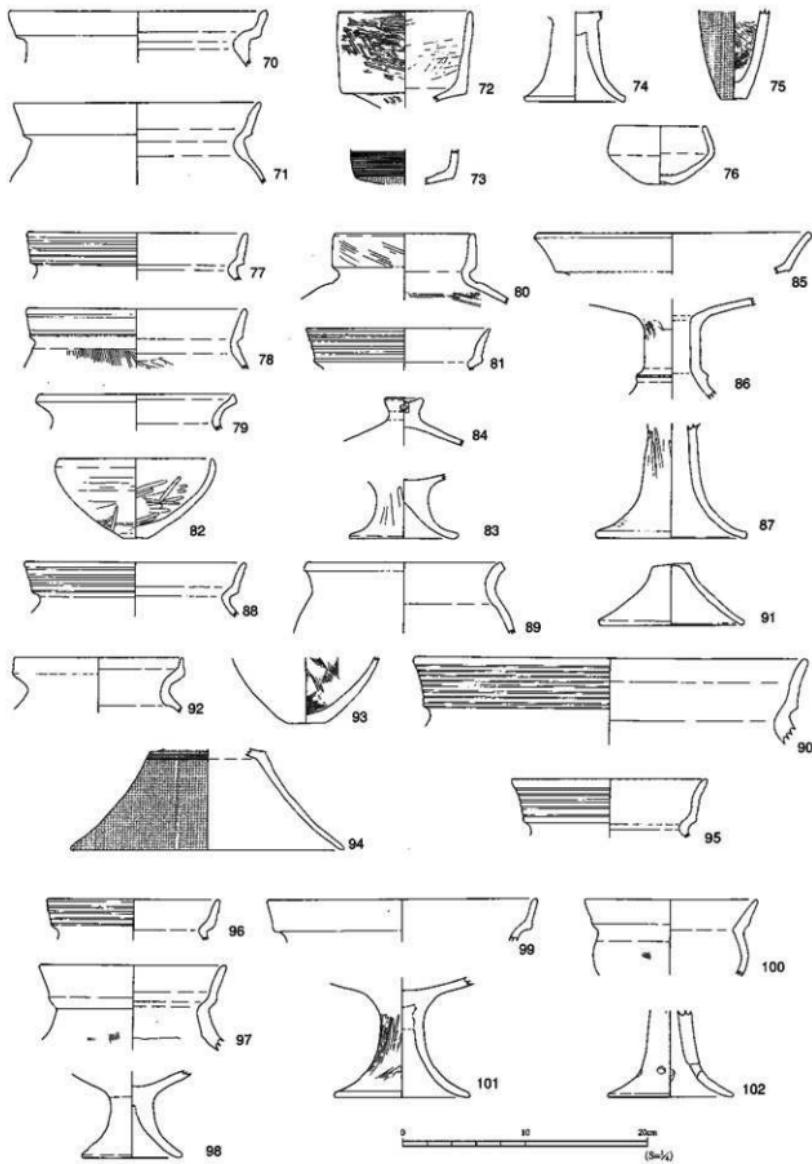
第7図 SD02土器出土状況図及びPit平面図・断面図 (1/50)



第8図 出土遺物実測図 (1/4)
SI01: I群 (1~19)、II群 (20~32)

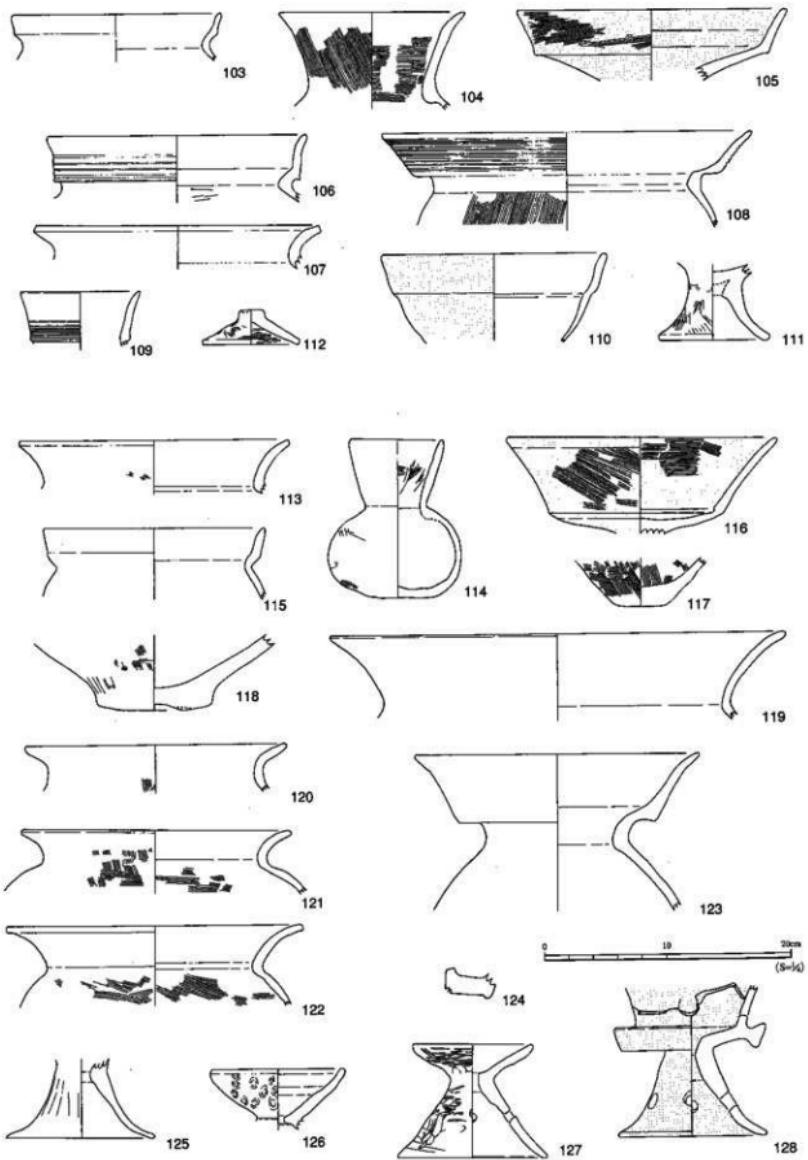


第9図 出土遺物実測図 (1/4)
SI01 : II群 (34~41)、III群 (42~69)



第10図 出土遺物実測図 (1/4)

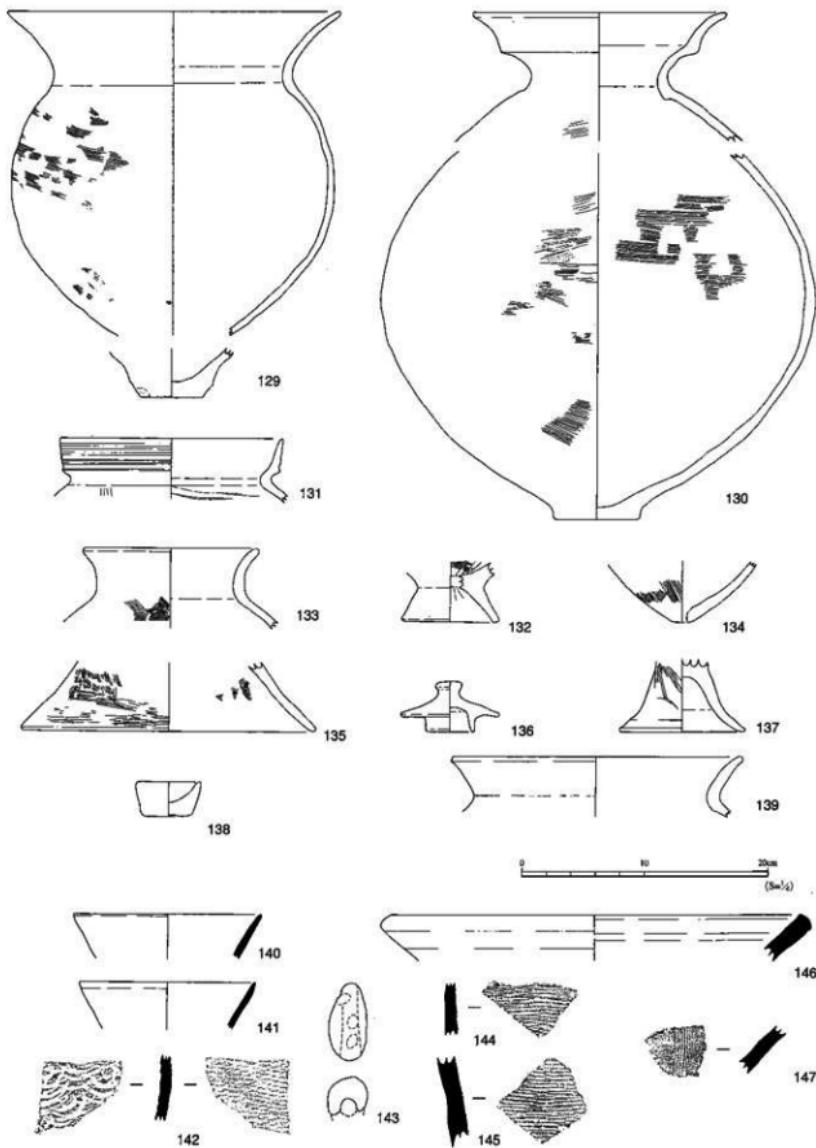
SI01 : IV群 (70~75)、P4 (76)、東トレンチ (77~87)、西トレンチ (88~91)、南トレンチ (92~94)、北トレンチ (95)、東畔 (96~98)、南畔 (99~102)



第11図 出土遺物実測図 (1/4)

SI01：炉周辺 (103～105)、西排水溝 (106～112)

SD02：1群 (113、114)、2群 (115)、3群 (116、117)、4群 (118)、5群 (119～127)、6群 (128)



第12図 出土遺物実測図 (1/4)

SD02: 7群 (129)、8群 (130)、その他 (131~138)

SD03:(139)、包含層 (140~147)

がり、口縁端部が尖る。口縁部内外面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整、胴部内面にはケズリ調整をそれぞれ行う。26は口縁部内面に明瞭な段を持たず、口縁部が頸部から外反しながら立ち上がり、口縁端部を丸く納める。口縁下部がやや突出する。口縁部外面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。外面に煤が付着する。27～30はくの字口縁壺である。27は口縁部が外反し、口縁端部に面取りを行う。口縁内外面にはナデ調整、頸部内面にはハケ調整を行う。28は口縁部が外反し、口縁端部に面取りを行う。口縁内外面にはナデ調整、胴部内外面にはハケ調整を行う。外面に煤が付着する。29は口縁部が外反し、口縁端部に面取りを行い、上端を摘み上げる。口縁端部下端は垂下させる。口縁部外面に1条の沈線を施す。口縁外面にはナデ調整、頸部内面にはハケ調整を行う。外面に煤が付着する。30は小型壺である。口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部が肥厚する。外面ともナデ調整を行う。外面に煤が付着する。31～33は壺である。31・32是有段口縁壺である。31は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁下部が突出する。内外面にはミガキ調整、胴部外面にはハケ後ミガキ調整、胴部内面にはケズリ調整をそれぞれ施す。33是有段口縁を持ち、胴部が八の字状に広がっていく。口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部に面取りを行い、上方に摘み上げる。外面にはミガキ調整、胴部内面上半にはケズリ調整、胴部内面下半にはハケ調整を行う。34～38は鉢である。34～36是有段口縁鉢である。34は口縁部が弱く外反しながら直線的に立ち上がる。外面にはハケ後ミガキ調整を行う。35は口縁部が外反しながら直線的に立ち上がる。内外面ともナデ調整を行い、赤彩を施す。36は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。外面にはハケ調整、内面にはミガキ調整を行う。外面に煤が付着する。37は小さな高台の付く底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。内外面ともハケ後ミガキ調整を施す。38は台付鉢の脚台部である。鉢の内面にはミガキ調整を行う。脚台部の内外面に煤が付着する。39は高杯の脚部である。脚部外面は摩耗が著しいが、ミガキ調整が確認できる。脚部内面はハケ調整を行う。40は台付壺か台付壺の脚台部である。脚台部外面は摩耗が著しいが、ミガキ調整が確認できる。41は扁平な蓋である。内面はミガキ調整を行う。外面は摩耗が著しいため、調整は確認できなかった。外面に煤が付着する。

Ⅲ群（第9図42～69）

42～56は壺である。42～45是有段有文口縁壺である。42は口縁帯に4条の擬凹線文を施す。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。内面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。43は口縁帯に4条の擬凹線文を施す。口縁部が斜め上方に弱く外反しながら立ち上がる。口縁下部がやや突出する。内外面ともナデ調整を行う。44は口縁帯に6条の擬凹線文を施す。口縁部が斜め上方に弱く外反しながら立ち上がる。口縁下部がやや突出する。口縁部内面にはナデ調整、胴部内面にはケズリ調整、胴部外面にはハケ調整を施す。外面に煤が付着する。45は摩耗が著しいが、口縁帯に3条以上の擬凹線文を施すことが確認できる。口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる。内外面ともナデ調整を行う。46～54是有段無文口縁壺である。46は口縁部が内湾気味に直して立ち上がる。内外面ともナデ調整を施す。47は口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる。内面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。口縁部内外面に煤が付着する。48は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁部内外面にはナデ調整、胴部内面にはケズリ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。外面全体に煤が付着する。49は口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる。口縁下部がやや突出する。内外面ともナデ調整を行う。50は口縁部が斜め上方に弱く外反しながら立ち上がる。口縁下部が突出する。内外面ともナデ調整を行う。外面に煤が付着する。51は口縁部がほぼ直立気味に立ち上げる。口縁下部がやや突出する。口縁部外面下部にはハケ調整を行う。52は口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる。口縁下部がやや突出する。口縁部内外面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。53は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部が尖る。口縁部下部が突出する。口縁部外面にはナデ調整、胴部内面にはケズリ調整を行う。胴部外面は剥離している。54は

口縁部が緩く屈曲し、口縁端部を丸く納める。口縁部内外面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。外面全体、口縁部内面に煤が付着する。55・56はくの字口縁臺である。55は口縁部が弱く外反し、口縁端部に面取りを行う。内面にはナデ調整、外面にはハケ調整を行う。内外面に煤が付着する。56は口縁部が外反し、口縁端部を面取りし、上端を擒み上げる。口縁内面に2条の沈線を施す。口縁部内外面にはナデ調整、胴部内面にはケズリ調整を行う。口縁部外面、胴部内面に煤が付着する。57~66は盃である。57~64是有段口縁臺である。57は口縁帯に11条の擬凹線文を施す。口縁部が外反しながら立ち上がる。筒状の頸部を持つ。内面にはナデ調整、外面にはミガキ調整を行う。外面に赤彩を施す。58は口縁帯に9条の擬凹線文を施す。口縁部が外反しながら立ち上がり、口縁下部は垂下させている。内外面ともナデ調整を行う。口縁部内外面に煤が付着する。59は口縁帯に5条の擬凹線文を施す。口縁部が外反しながら立ち上がる。筒状の頸部を持つ。内面にはナデ調整、外面にはミガキ調整を行う。外面に赤彩を施す。60は口縁部が外反しながら立ち上がり、口縁端部が尖る。口縁部内外面にはナデ調整、胴部内面にはミガキ調整を行う。内外面に煤が付着する。61は口縁帯に8条の擬凹線文を施す。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。筒状の頸部を持つ。口縁部内外面にはナデ調整、頸部内面にはハケ調整を行う。62は口縁帯に6条の擬凹線文を施す。口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。筒状の頸部を持つ。内外面ともナデ調整を行う。外面、口縁部内面に赤彩を施す。63は口縁帯に9条の擬凹線文を施す。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁下部は少し垂下させている。内外面ともナデ調整を行う。外面に赤彩を施す。64は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁部内外面にはミガキ調整、胴部内面にはケズリ後ミガキ調整を行う。65・66は細長頸盃である。65は細長い口縁部を有し、偏球形の胴部を持つ。頸部と胴部の境、胴部最大径の位置には突帯を貼り付け、突帯上にはヘラ状工具による連続刻みを行う。口縁部内面にはハケ調整、胴部外面、口縁部外面にはナデ調整をそれぞれ行う。外面に赤彩を施す。66是有段口縁を持ち、口縁下部に2条の沈線を施す。内外面ともナデ調整を行う。67・68は高杯である。67は口縁部が外反し、杯底部に段を持つ。内外面とも摩耗が著しいため、調整は確認できなかった。68は深い杯底部に強く外反する口縁部を持つ。内外面ともナデ調整を行う。69は高杯の脚部である。脚柱部は緩やかに開く。脚柱部と裾部の境には焼成前に4方向穿孔している。裾部内面にはハケ調整、外面にはナデ調整を行う。

M群（第10図70~75）

70・71是有段無文口縁臺である。70は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。内外面とも摩耗が著しいため、調整は確認できなかった。外面に煤が付着する。71は口縁部が斜め上方に弱く外反しながら立ち上がる。口縁下部が突出する。内外面とも摩耗が著しいため、調整は確認できなかった。72・73は小型高杯である。72は口縁部がほぼ直立気味に立ち上がるコップ状の杯部を持つものである。内面にはケズリ調整、外面には丁寧なミガキ調整を行う。73は口縁端部・脚部が欠けている。口縁帯に10条の擬凹線文が確認できる。内外面ともナデ調整を行う。外面に赤彩を施す。74は高杯の脚部である。脚柱部は緩やかに外反し、端部を丸く納める。脚部内面にケズリ調整を行う。75は器種不明である。口縁部を欠く。角杯状の形態を持つ。内面にはハケ調整、外面には丁寧なミガキ調整を行う。外面に赤彩を施す。

P 4（第10図76）

76は鉢である。平底の底部に胴部で内屈する口縁部を持ち、口縁端部を丸く納める。内面にはナデ調整、外面にはミガキ調整を行う。

東トレント（第10図77～87）

77～79は壺である。77は有段有文口縁を持ち、口縁帯に4条の凹線文を施す。口縁部は斜め上方に弱く外反しながら立ち上がる。口縁下部がやや突出する。内面にはナデ調整を行う。78は口縁部内面に明瞭な段を持たず、口縁部が頸部から斜め上方に外反しながら立ち上がる。口縁帯に2条の沈線を施す。脇部内外面にハケ調整を行う。79はくの字口縁を持ち、口縁端部を面取りし、上端を摘み上げる。内外面ともナデ調整を行う。80・81は有段口縁壺である。80は口縁部がほぼ直立して立ち上がる。口縁部内面・脇部外面にはナデ調整、口縁部外面・脇部内面にはハケ調整を行う。81は有段口縁を持ち、口縁帯に5条の擬凹線文を施す。口縁部が外反しながら立ち上がり、口縁端部は尖る。内外面ともナデ調整を行う。82は鉢である。平底の底部から内湾気味に開く脇部を持ち、口縁部が直立気味に立ち上がる。内外面ともミガキ調整を行う。83は台付鉢の脚台部である。脚据部が外反し、口縁部を丸く納める。鉢内部・脚台部外面にはミガキ調整を行う。脚台部内面は摩耗が著しく、調整は確認することはできなかった。84は蓋である。口縁部は欠けるが、八の字状に開く笠部を持つと思われる。つまみに焼成前に穿孔している。85は器台である。口縁部は外反し、口縁下部を少し垂下させている。口縁端部に面取りを行う。受底部の上半と下半の境には明瞭な段を持つ。内外面ともミガキ調整を行う。86は器台の脚柱部である。脚柱部と裾部の境にヘラ状工具による連続削みを持つ突帯を貼り付けた段を持っている。外面はミガキ調整を行っている。87は高杯の脚部である。脚据部は強く外反し、口縁部を丸く納める。外面は摩耗が著しいが、ミガキ調整を確認することができる。

西トレント（第10図88～91）

88～90は壺である。88・90は有段有文の口縁を持つ。88は口縁帯に4条の擬凹線文を施す。口縁部が斜め上方に弱く外反しながら立ち上がる。口縁下部がやや突出する。内外面ともナデ調整を行う。90は口縁帯に8条の擬凹線文を施す。口縁部がほぼ直立気味に立ち上がり、口縁端部に向かって外反する。内外面ともナデ調整を行う。内面全体・口縁部外面に煤が付着する。89はくの字口縁を持ち、口縁端部に面取りを施す。内外面ともナデ調整を行う。外面に煤が付着する。91は大きく八の字に開く開く笠部を持つ蓋である。内外面にはミガキ調整が確認できる。

南トレント（第10図92～94）

92は有段無文口縁壺である。口縁部が直立して立ち上がる。内外面ともナデ調整を行う。口縁部外面に煤が付着する。93は壺の底部である。内面にはハケ調整を行う。外面全体に煤が付着する。94は器台の脚部である。脚据部が大きく八の字に開き、端部が尖る。脚柱部と裾部の境に明瞭な段を持ち、2条の沈線を施す。外面にはミガキ調整を行い、赤彩を施す。

北トレント（第10図95）

95は有段有文口縁壺である。口縁帯に5条の擬凹線文を施す。口縁部が外反しながら立ち上がり、口縁端部が尖る。内外面ともナデ調整を行う。外面全体に煤が付着する。

東畔（第10図96～98）

96は有段有文口縁壺である。口縁帯に4条の擬凹線文を施す。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部が尖る。内外面ともナデ調整を行う。97は有段口縁壺である。口縁部が外反しながら立ち上がり、口縁下部がやや突出する。筒状の頸部を持つ。口縁部内外面にはナデ調整、脇部外面にはハケ調整を行う。98は高杯の脚部である。脚部は外反する。外面には摩耗が著しいが、ミガキ調整が確認できる。

南群（第10図99～102）

99・100は有段無文口縁壺である。99は口縁部がほぼ直立気味に立ち上がり、口縁下部がやや突出する。内外面ともナデ調整を行う。外面全体に煤が付着する。100は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部が尖る。口縁部内外面・胴部内面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。外面に煤が付着する。101・102は高杯の脚部である。101は脚据部が外反し、端部を丸く納める。杯部内面・脚部内外面にはミガキ調整を行う。内外面とも煤が付着する。102は脚柱部は据部に向かって緩やかに開き、強く屈曲する据部を持ち、端部は尖る。脚柱部と据部の境で焼成前に4方向穿孔を行う。内面にはナデ調整を行う。外面は摩耗が著しいが、ミガキ調整が確認できる。

炉周辺（第11図103～105）

103は有段無文口縁壺である。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁下部がやや突出する。内外面ともナデ調整を行う。104は長頸広口壺である。頸部が緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁部近くで強く外反する。頸部内外面・胴部外面にはハケ調整、口縁部内外面にはナデ調整を行う。内外面に煤が付着する。105は器台である。口縁部は外反し、口縁端部を丸く納める。口縁下部を少し垂下させている。受底部上半と下半の境には明瞭な段を持つ。受部外面上半にはハケ後ミガキ調整、外面下半にはミガキ調整を行う。内面は摩耗が著しいため、調整は確認することができなかった。内外面とも赤彩を施す。

西排水溝（第11図106～112）

106～108は壺である。106・108は有段有文口縁壺である。106は口縁帶に4条の擬凹線文を施す。口縁部が斜め上方に弱く外反しながら立ち上がる。口縁下部がやや垂下させている。口縁部内面にはナデ調整、胴部内面にはケズリ調整を行う。外面に煤が付着する。108は口縁帶に10条の擬凹線文を施す。口縁部が強く外反し、口縁端部が尖る。口縁部内面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。外面に煤が付着する。107はくの字口縁壺である。短い口縁部が強く外反し、口縁端部に面取りを行う。内外面ともナデ調整を行う。外面に煤が付着する。109は有段口縁壺である。口縁部下半に6条の擬凹線文を施す。口縁部が外反しながら立ち上がる。口縁部外面上半・口縁部内面に丁寧なミガキ調整が確認できる。外面に煤が付着する。110は有段口縁鉢である。口縁部が弱く外反しながら立ち上がる。内外面とも摩耗が著しいが、ハケ後ミガキ調整が確認できる。外面に赤彩を施す。111は高杯の脚部である。据部が八の字状に開き、端部を丸く納める。脚部外面にはハケ後ミガキ調整、脚部内面にはハケ調整を行う。112は八の字状に開く笠部を持つ蓋である。口縁端部に面取りを行う。内外面に丁寧なミガキ調整を行う。外面に煤が付着する。

S D 02

1群（第11図113・114）

113はくの字口縁壺である。短い口縁部が強く外反し、口縁端部に面取りを行う。口縁部内外面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。114は直口口縁壺である。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、偏球形の胴部を持つ。口縁部内面・胴部外面にハケ調整を行う。外面の一部・胴部内面全体に煤が付着する。

2群（第11図115）

115は有段無文口縁壺である。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部が尖る。内外面ともナデ調整を行う。

3群（第11図116・117）

116は高杯である。口縁部が外反する。杯部上半と下半の境に明瞭な段を持つ。内外面ともヘラ後ミガキ調整を行い、赤彩を施す。117は底部である。外面にハケ調整を行う。外面に煤が付着する。

4群（第11図118）

118は底部である。底面に4つ粘土が貼り付けてある。外面にはハケ調整を行う。外面に煤が付着する。

5群（第11図119～127）

119～122はくの字口縁臺である。119は長く伸びる口縁部が強く外反する。内外面とも摩耗が著しいため、調整は確認できなかった。外面全体に煤が付着する。120は頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が強く外反する。口縁端部に面取りを行う。口縁部内外面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。外面全体に煤が付着する。121は口縁部が強く外反し、口縁端部を丸く納める。口縁部内外面にはナデ調整、頸部外面・胴部内外面にはハケ調整を行う。外面全体・口縁部内面に煤が付着する。122はやや長めの口縁部が強く外反し、口縁端部に面取りを行う。口縁部内外面にはナデ調整、胴部内外面にはハケ調整を行う。外面全体・口縁部内面に煤が付着する。123・124は盃である。123は二重口縁臺である。外傾した頸部から内面に明瞭な段を有し、口縁部が強く外反する。口縁端部は尖る。口縁下部がやや垂下する。内外面とも摩耗が著しいが、胴部内面にハケ調整が確認することができる。124は複合口縁臺であると思われる。125は高杯の脚部である。脚部が八の字状に外反して開く。内外面とも摩耗が著しいが、脚部外面にはミガキ調整が確認できる。126・127は器台である。126は口縁部が斜め上方に内湾気味に立ち上がる。口縁端部を上方に摘み上げ、丸く納める。外面には指頭圧痕が残る。内外面とも丁寧なミガキ調整が確認できる。口縁端部に煤が付着する。127は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く納める。受部からくの字状に外反する脚部を持つ。脚部には焼成前に4方向穿孔している。外面・受部内面にはミガキ調整、脚部内面にはナデ調整を行う。外面に煤が付着する。

6群（第11図128）

128は装飾器台であり、口縁部を欠く。脚部は裾部に向かって緩やかに開き、強く屈曲する裾部を持つ。受底部は強く外反する。受底部端部には面取りを行い、上端は付加状の端部を持ち、下端は垂下帯を貼り付ける。端部の10mm程手前の箇所に透穴を持つ体部が貼り付ける。透穴の形状は不明であるが、涙粒形をしていると考える。脚部には径約18mmの穴を4方向穿孔する。全面にナデ調整を行い、赤彩を施す。

7群（第12図129）

129はくの字口縁臺である。口縁部が強く外反し、口縁端部を丸く納める。頸部は頸部上半部に最大径を持つ倒卵型で、底部は小さな平底である。口縁部内外面・胴部内面にはナデ調整、頸部外面にはハケ調整を行う。外面に煤が付着する。

8群（第12図130）

130は二重口縁臺である。外傾した頸部から内面に明瞭な段を有し、口縁部が強く外反する。口縁端部に面取りを行う。口縁下部がやや突出する。脚部は球胴型で、底部は小さな平底である。口縁部内外面にはナデ調整、頸部内外面にはハケ調整を行う。外面に煤が付着する。

その他の出土土器（第12図131～138）

131は有段有文壺である。口縁帶に5条の擬凹線文を施す。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部が尖る。口縁下部がやや突出する。口縁部内面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整、胴部内面にはケズリ調整を行う。132は台付壺の脚台部である。脚台部は直線的に八の字状に開き、端部に面取りを行う。脚台部外面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。胴部内面に煤が付着する。133は短頸広口壺である。口縁部が弱く外反しながら立ち上がり、口縁端部を丸く納める。口縁部内外面・胴部内面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。134は有孔鉢の底部である。底部には径約10mmの穴を焼成前に穿孔し、胴部はやや内湾しながら立ち上がる。胴部内面にはナデ調整、胴部外面にはハケ調整を行う。135・136は蓋である。135は八の字状に開く笠部を持ち、口縁端部に面取りを行う。笠部内面下半にはナデ調整、笠部内面上半にはハケ調整、外面にはミガキ調整を行う。136はつまみから直線的にのびる笠部の内側には短いかえしがつく。全体にナデ調整を行う。つまみ及び笠部外面に赤彩を施す。外面全体・内面の一部に煤が付着する。137は高杯の脚部である。脚裾部が外反し、端部に面取りを行う。脚部内面にはナデ調整、脚部外面にはミガキ調整を行う。脚部外面とも赤彩を施す。138は手捏ね成形の小型土器である。コップ状の形態をとる。外面に煤が付着する。

S D 03（第12図139）

139はくの字口縁甕である。口縁部が外反し、口縁端部に面取りを行う。内外面とも摩耗が著しいため、調整は確認できなかった。

包含層（第12図140～147）

140～142は須恵器である。140・141は杯身である。140は口径16cmを測る。内外面とも回転ナデ調整を行う。141は口径15cmを測る。内外面とも回転ナデ調整を行う。142は甕の胴部である。外面には擬格子状平行叩き、内面には同心円文を施す。143は管状土錐である。全長約6.3cm、径約3.2cm、孔径約1.5cmを測る。外面に指頭圧痕を残す。144～147は珠洲である。144・145は甕の胴部である。外面に平行叩きを施す。146・147は擂り鉢である。146は口径33cmを測り、珠洲Ⅲ期に比定できる。147は内面に10条の卸し目が確認できる。

IV まとめ

今回の調査では、弥生時代終末期から古墳時代初期に属する遺構・遺物を確認した。ここでは、先学の研究成果をもとに南部I遺跡の遺構・遺物を分析・検討して、まとめとする。

1 遺構

弥生時代終末期の堅穴住居跡は幡中町において千坊山遺跡で22棟確認されている〔片岡ほか1995〕。大型の円形(Aタイプ)、中型の隅丸方形(B1タイプ)と小型の隅丸方形(B2タイプ)に分類されている。帰属時期は出土土器から月影I・II式期である。時期の分かる住居跡から見る平面形の傾向は、月影I式期では方形が多く、月影II式期では円形・方形がセットで組み合わさる。今回の調査で確認された堅穴住居跡S I 01は千坊山遺跡の分類に当てはめると、Aタイプとなる。帰属時期は出土土器から月影II式～白江式期である。

大溝跡S D02は幅約10mを測り、覆土観察から自然河川であったと考えられる。溝東側肩部のほぼ同一レベルで土器まだりが数ヶ所確認されている。これらは吉岡康暢氏の大別する〔吉岡1991〕C類型(村落外の祭祀)で、溝への土器廃棄(川清祭祀)であると考える。帰属時期は白江式期である。

2 遺物

今回の調査において、特にS I 01・S D02から多数の弥生土器が出土した。型式分類するにあたり、まず、壺・壺・鉢・高杯・器台・蓋の6器種に分類する。次に器種ごとに口縁部や体部の形態により、ABCDと大別し、形態差で1234-、さらにa bと細別する。

(1) 变形土器の分類(第13図)

A-有段有文口縁壺

A 1 : 口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。

A 2 : 口縁部が斜め上方に弱く外反しながら立ち上がる。口縁下部がやや突出する。

A 3 : 口縁部が外反しながら立ち上がる。口縁端部が尖る。

A 4 : 口縁部がほぼ直立する。口縁内面がやや膨らみ端部に向かって外反する。口径30cm前後の大型品である。

A 5 : 口縁部が強く外反する。口径30cm前後の大型品である。

B-有段無文口縁壺

B 1 : 口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部を丸く納める。

B 2 : 口縁部が斜め上方に弱く外反しながら立ち上がる。口縁下部がやや突出する。

B 3 : 口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部が尖る。

B 4 : 口縁部が頭部から外反して立ち上がる。口縁下部がやや突出する。口縁部内面に明瞭な段を持たない。

B 5 : 口縁部が緩く屈曲し、口縁端部を丸く納める。(近江・東海系)

C-「く」の字口縁壺

C 1 : 口縁部が外反し、口縁端部に面取りを行う(C 1 a)。面取りを行い、上端を描み上げるもの(C 1 b)。

口縁外面に1条の沈線を持つものや口縁内面に2条の沈線を持つものがある。

C 2 : 短い口縁部が強く外反する。

C 3 : 小型壺。口縁部は内済気味に立ち上がり、口縁端部を肥厚させる。

(2) 壺形土器の分類 (第13図)

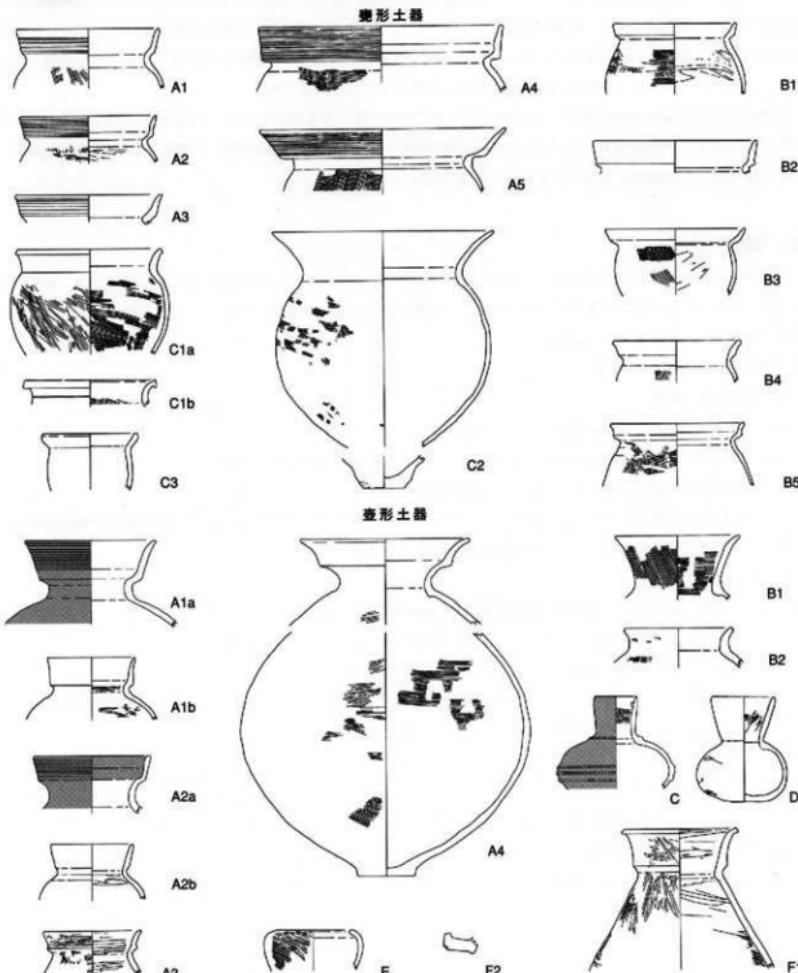
A - 有段口縁壺

A 1 : 口縁部が外反する。筒状の頸部を持つもの (A 1 a) とそれ以外 (A 1 b) がある。

A 2 : 口縁部がやや直立気味に立ち上がる。筒状の頸部を持つもの (A 2 a) とそれ以外 (A 2 b) がある。

A 3 : 口縁部がやや外反する。口縁下部がやや突出する。

A 4 : 頸部から内面に段を有して口縁部が強く外反する (二重口縁壺)。



第13図 壺形土器・壺形土器の分類 (1/6)

B - 広口壺

B 1 : 頸部が長いもの（長頸広口壺）。 B 2 : 頸部が短いもの（短頸広口壺）。

C - 細長頸壺

D - 無頸壺

E - 直口壺 口縁部が内湾気味に直立し、球形の胴部を持つ。

F - その他の壺

F 1 : 口縁部が緩やかに外反し、口縁端部を上方に摘み上げる。頸部を境に胴部は「ハ」の字状に開いていく。

F 2 : 複合口縁壺。

(3) 鉢形土器の分類（第14図）

A - 有段口縁鉢 外反する口縁部を持つ。

B - 碗形鉢

B 1 : 内湾気味に開く頸部、口縁部を持つ。平底を呈する。

B 2 : 内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち、小さな脚部を持つ（B 1 a）と小さな円盤状の底部を持つ（B 2 b）。

C - 有孔鉢

(4) 高杯形土器の分類（第14図）

A - 有段高杯 途中で屈曲し、外反する杯部を持つ。

B - 小型高杯 小さな椀形の杯部を持つ。

(5) 器台形土器の分類（第14図）

A - 有段口縁器台

B - 小型器台 内湾する口縁部に、「ハ」の字状に開く脚部を持つ。

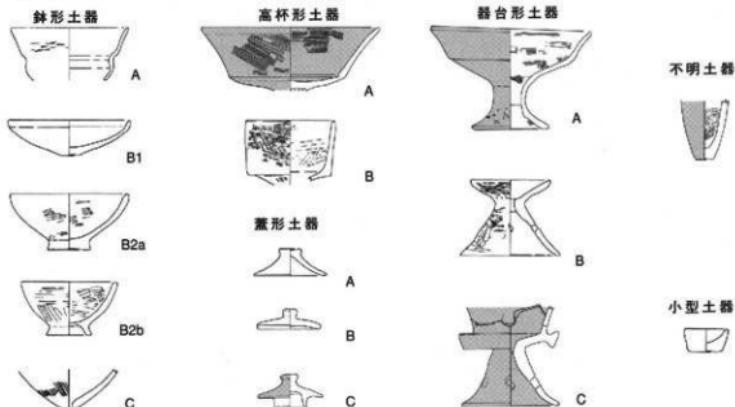
C - 複合（装飾）器台

(6) 蓋形土器の分類（第14図）

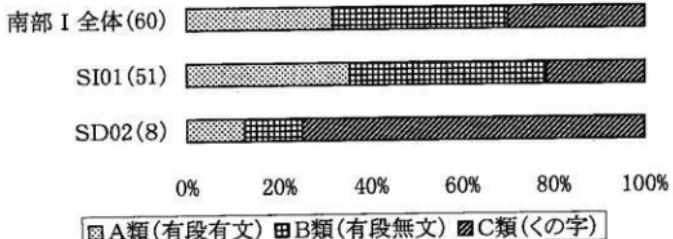
A - 大きく「ハ」の字状に開く傘部を持つ蓋。つまみに孔を持つものもある。

B - 扁平な蓋。

C - 小型で受けが下端につく形態の蓋。蓋Cに伴うものと考えられる。



第14図 鉢形土器・高杯形土器・器台形土器・蓋形土器等の分類 (1/6)



(7) 变形土器の口縁部形態の検討（第15図）

南部I遺跡全体では、A類：31.7%、B類：38.3%、C類：30%であり、有段無文口縁壺（B類）・くの字口縁壺（C類）が多く見られる越中の様相〔中村・岩崎ほか1997〕を顕著に表している。月影II式を中心とするSI01は、A類：35.3%、B類：43.1%、C類：21.6%である。白江式を中心とするSD02は、A類：12.5%、B類12.5%、C類：75%である。当遺跡の資料数は十分ではないが、白江式期になると、くの字口縁壺（C類）が急増していることが分かる。これは、従来指摘されてきたこと〔小田木1989、高橋1995〕である。

(8) 編年

今回の調査では、かなりまとまった形で、大量の土器が出土した。これらの土器は、堅穴住居跡SI01から出土したもの、大溝跡SD02から出土したものに大きく分けることができる。それぞれの出土土器の帰属時期を先学の土器編年〔谷内尾1983、久々1984、田嶋1986・1991、小田木1989、吉岡1991、高橋1995など〕と対応させることによっておおまかな編年的位置付けを行いたい。

SI01出土土器の年代の上限は、92の壺に求められる。92の壺は法仏式の特徴を色濃く残す古相の土器であるが、その他の土器観察結果から月影式段階まで残っていたものであると考える。また、下限は54の壺に求められる。54の壺は近江系の影響を受けているものと考える。SI01出土土器の帰属時期は概ね、月影II式（漆町4群併行期）～白江式古相（漆町5群併行期）であり、若干月影I式に通るものと考えたい。

SD02出土土器の帰属時期を考える上で指標となるのは、114・123・130の壺、126・127の器台である。114は畿内系の直口壺である。123・130は畿内系の二重口縁壺である。126・127は小型器台である。これら外來系の土器は白江式に属するものであり、SD02出土土器の帰属時期は白江式期（漆町5・6群併行期）である。

3 結び

今回の調査により、南部I遺跡が月影式期から白江式期に統く集落跡であることが明らかになった。堅穴住居跡1棟・溝跡等の遺構が検出され、そこから月影式から白江式に属する土器が多数出土している。また、赤彩された土器等の祭式土器も多く出土し、溝跡では白江式期に川瀬祭祀を行っていたと考えられる。

今回出土した土器は、今まで発掘例の少なかった越中の白江式期の土器様相を知る上での重要な資料となり、越中だけでなく北陸の古墳出現期の土器様相解明の一助となりうるものであると考える。

また、今回の調査地は1996年に八尾町翠尾I遺跡で行われた本調査の北北東約1.5kmの所にある。翠尾I遺跡は調査の結果、首長クラスの人の存在が想定できるような高いレベルに根差す集落であったと推測されている〔中村・岩崎ほか1997〕。当遺跡は翠尾I遺跡との距離や出土土器の比較から同一集落である可能性が高いと思われる。

参考文献

- 大川清・鈴木公雄・工業善通 1996 『日本土器辞典』 雄山閣
- 押川恵子・山本正敏 1992 『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(2)－布目沢北遺跡第3次調査－』 富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会
- 小田木治太郎 1989 「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学Ⅱ 石川考古学研究会誌 第32号』 石川考古学研究会
- 片岡英子ほか 1995 『千坊山遺跡(1)』 姫中町教育委員会
- 久々忠義ほか 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－』 上市町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター
- 久々忠義ほか 1984 『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町木製品・総括編－』 上市町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター
- 楠正勝 1995 『金沢市南新保D遺跡Ⅱ』 金沢市・金沢市教育委員会
- 楠正勝 1996 『西念・南新保遺跡IV』 金沢市・金沢市教育委員会
- 高橋浩二 1995 「北陸における古墳出現期の社会構造－土器の計量的分析と古墳から－」『考古学雑誌』80-3 日本考古学会
- 高橋浩二 1995 「越中における古墳出現期の様相」『大境』第17号 富山考古学会
- 田嶋明人 1986 「IV 考察 一漆町遺跡出土土器の縦年別考察－」『漆町遺跡Ⅰ』 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1991 「5 北陸」『古墳時代の研究 6 七輪器と須恵器』雄山閣
- 出越茂和 1986 「外來系土器の出現と「月影式」の終焉」『シンポジウム「月影式」土器について』 石川考古学研究会
- 出越茂和ほか 1995 『石川県金沢市上荒屋遺跡Ⅰ』 金沢市教育委員会
- 橋木美道 1986 「「月影式」土器の成立」『シンポジウム「月影式」土器について』 石川考古学研究会
- 古川登 1994 「北陸型四隅突出型埴丘墓について」『大境』第16号 富山考古学会
- 麻柄一志 1986 「弥生・古墳時代集落の変遷－北陸地方の住居量群分析ノート」『大境』第10号 富山考古学会
- 中村栄・岩崎善尋ほか 1997 『翠尾I遺跡発掘調査報告書1』 八尾町教育委員会
- 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学 石川考古学研究会誌 第26号』 石川考古学研究会
- 吉岡康暢 1991 『日本海域の土器・陶磁器 [古代編]』 六興出版

第1表 遺物観察表(弥生土器)

番号	出土地点	器種	分類	口径	口残	底径	高さ	胎土	焼成	色調	内様	外様	備考
1	S101 I群(No.23)	要	A2	15	1.6			粗	不良	灰白			
2	S101 I群(⑤層)	要	A4	27.8	2			やや粗	良好	明黄褐色	有		
3	S101 I群(No.22)	要	A4	29.4	0.5			粗	やや良好	にぶい橙			
4	S101 I群(No.2)	要	B2	17.6	1			やや粗	やや良好	灰白			
5	S101 I群(No.12)	要	B2	17	1.8			粗	やや良好	にぶい黄褐色			
6	S101 I群(No.23)	要	B2	14.8	2.7			粗	やや良好	灰白			
7	S101 I群(No.9)	要	C1b	13	3.3			やや密	不良	灰白			有
8	S101 I群(No.14)	要	Cla	15	2			密	やや良好	灰褐色	有		
9	S101 I群(No.21)	底部					6	密	やや良好	灰白	有	有	
10	S101 I群(⑤層)	要	A1b	9.8	1.8			やや密	良好	にぶい橙			
11	S101 I群(②層)	要	B2	12.8	2.3			密	良好	にぶい黄褐色			
12	S101 I群(No.6)	要	D	9	1.6			密	やや良好	にぶい橙			
13	S101 I群(No.3・4)	鉢	B2b	11.8	1.5	4.4	6.4	密	やや良好	にぶい黄褐色			
14	S101 I群(No.8)	鉢	B2b	14.2	1.5	5.2	6.9	密	良好	明黄褐色			
15	S101 I群(No.9)	鉢	B1	14.6	5.3	2	4.3	やや粗	良好	浅黄			
16	S101 I群(No.41)	高杯					10	密	やや良好	灰白			内外画赤彩
17	S101 I群(⑤層)	要合	A	24.8	2.2			密	良好	にぶい黄褐色			
18	S101 I群(No.18)	要台	A	19.5	2.8	9.4	12.9	密	やや良好	にぶい黄褐色			内外画赤彩
19	S101 I群(⑥層)	蓋	A	8.4	1.6			3.3	やや密	良好	黄褐色		
20	S101 II群(No.63)	要	AJ	16	3			粗	やや良好	明黄褐色	有		
21	S101 II群(No.61)	要	A1	17	1.7			粗	やや良好	にぶい橙			
22	S101 II群(No.39)	要	A1	15	2			やや粗	やや良好	にぶい黄褐色	有		
23	S101 II群(No.38)	要	A3	17.8	3.6			やや粗	良好	にぶい黄褐色	有		
24	S101 II群(No.44)	要	B1	17	1			粗	やや良好	浅黄褐色			
25	S101 II群(No.70)	要	B3	16.9	1.5			やや粗	良好	にぶい黄褐色			
26	S101 II群(①・②層)	要	B4	15	3.8			やや粗	良好	にぶい黄褐色	有		
27	S101 II群(⑥層)	要	Cla	18.8	1.5			やや密	良好	橙	有		
28	S101 II群(No.67)	要	Cla	17.6	6.8			やや密	良好	にぶい橙	有		
29	S101 II群(No.48)	要	C1b	16.8	8.4			やや密	良好	橙	有		
30	S101 II群(No.34)	要	C3	11.6	1.5			やや密	不良	灰黄	有		
31	S101 II群(No.61)	要	A3	12	4.8			やや粗	不良	にぶい黄褐色			
32	S101 II群(No.59)	要	A3	11.8	3			密	やや良好	にぶい蜜			
33	S101 II群(No.31)	要	F1	13.4	3			密	良好	にぶい黄褐色			
34	S101 II群(⑤層)	鉢	A1	14	1.8			密	良好	にぶい黄褐色			
35	S101 II群(⑦層)	鉢	A1	10.8	2			密	良好	橙			内外画赤彩
36	S101 II群(No.69)	鉢	A1	18	0.8			やや密	やや良好	にぶい黄褐色	有		
37	S101 II群(No.65)	鉢	B2a	11.2	3	5.4	6.5	やや密	やや良好	灰白			
38	S101 II群(No.40)	鉢	B2			12		密	良好	にぶい黄褐色	有		
39	S101 II群(No.35)	高杯					10.2	密	やや良好	にぶい黄褐色			
40	S101 II群(7層)	底部					9	やや密	やや良好	灰灰	有		
41	S101 II群(No.52)	要	B	7.2	11			2.4	やや粗	不良	にぶい黄褐色	有	
42	S101 III群(No.78)	要	A1	17	3			粗	やや良好	浅黄褐色			
43	S101 III群(No.85・97)	要	A2	15.8	1.5			やや密	やや良好	明褐色			
44	S101 III群(No.80)	要	A2	16.4	3			やや密	良好	橙	有		
45	S101 III群(No.102)	要	A4	29.6	1			やや粗	良好	浅黄褐色			
46	S101 III群(No.103)	要	B1	17.8	1.5			やや粗	良好	にぶい橙			
47	S101 III群(No.102)	要	B1	19.8	1.5			やや密	やや良好	にぶい黄褐色	有		
48	S101 III群(No.79・97)	要	B1	14.8	7.2			やや密	やや良好	灰黄	有		
49	S101 III群(No.102)	要	B2	17	1.5			やや粗	良好	橙			
50	S101 III群(⑦・⑧層)	要	B2	19.6	1.4			やや粗	不良	灰白			
51	S101 III群(No.81・84)	要	B2	17	3.6			やや粗	やや良好	にぶい黄褐色			
52	S101 III群(No.93・95・96)	要	B2	14.8	9			やや密	やや良好	灰白			
53	S101 III群(No.102)	要	B3	13	1.6			やや粗	良好	にぶい赤褐色			
54	S101 III群(No.102)	要	B5	15	3			やや密	不良	にぶい黄褐色	有		
55	S101 III群(⑦・⑧層)	要	Cla	19	1.8			やや粗	やや良好	にぶい黄褐色	有		
56	S101 III群(No.87)	要	C1b	16	1.7			やや密	やや良好	にぶい黄褐色	有		
57	S101 III群(No.94)	要	Ala	15.8	12			やや粗	やや良好	灰白			内外画赤彩
58	S101 III群(No.102)	要	A1b	17.6	4.6			密	不良	灰白	有	有	
59	S101 III群(No.77)	要	A1b	14	1.5			密	やや良好	灰白			内外画赤彩
60	S101 III群(No.97)	要	A1b	10.6	6.3			密	やや良好	灰白	有	有	
61	S101 III群(No.102)	要	A2e	17.4	1.5			やや密	やや良好	灰黄			内外画赤彩
62	S101 III群(No.82)	要	A2a	14	9.6			密	良好	にぶい黄褐色			内外画赤彩
63	S101 III群(No.95)	要	A2b	15	3			やや密	良好	にぶい黄褐色			
64	S101 III群(⑥層)	要	A2b	9.8	2.6			密	良好	灰白			
65	S101 III群(No.93・102)	要	C	5	3.4			密	良好	浅黄褐色			内外画赤彩
66	S101 III群(No.93)	要	C	5.6	1.5			粗	良好	橙			
67	S101 III群(No.97)	高杯	A	25.4	0.8			やや密	やや良好	にぶい黄褐色			
68	S101 III群(⑤・⑥層)	高杯	A	15	1.4			やや密	やや良好	灰白			
69	S101 III群(No.81)	高杯					14.8	密	良好	にぶい橙			

第1表 遺物観察表（弥生土器）

70	S101	N群(⑦-⑧)	甕	B1	20.8	1.5	やや密	良好	にふい櫻	有	
71	S101	N群(①-②層)	甕	B2	20	1.5	密	やや良好	櫻		
72	S101	N群(⑧層)	高杯	B	10.8	1.5	密	やや良好	灰黄		
73	S101	N群(③-④層)	高杯	B			やや密	良好	にふい櫻	外画面赤彩	
74	S101	N群(⑤-⑥層)	高杯			8.2	密	良好	浅黄櫻		
75	S101	N群(⑧層)	不明			2	密	良好	にふい櫻	外画面赤彩	
76	S101	P4	鉢	B1	7.2	3.5	2	4.7	密	良好	
77	S101	東トレンチ	甕	A2	17.8	2.2	やや粗	良好	にふい櫻		
78	S101	東トレンチ	甕	B4	17.6	3	やや粗	良好	櫻		
79	S101	東トレンチ	甕	C1b	15.8	1.5	粗	良好	櫻		
80	S101	東トレンチ	甕	A2b	11.2	4	密	良好	にふい櫻		
81	S101	東トレンチ	甕	A1b	13.8	1.6	やや密	不良	にふい櫻		
82	S101	東トレンチ	鉢	B1	12.4	1	2	6.4	密	やや良好	
83	S101	東トレンチ	底部			2.9	密	良好	灰白	有	
84	S101	東トレンチ	蓋	A			やや粗	良好	櫻	つまみに有孔	
85	S101	東トレンチ	舞台	A	22	1	密	やや良好	にふい櫻		
86	S101	東トレンチ	高杯			12.2	密	良好	浅黄櫻		
87	S101	東トレンチ	高杯	A2	17.8	1.5	やや密	良好	灰白		
88	S101	西トレンチ	甕	C1a	15.8	2.2	やや密	やや良好	灰白	有	
89	S101	西トレンチ	甕	A4	31.8	0.6	密	不良	赤櫻	有	
90	S101	西トレンチ	甕	A	11.8	12	密	良好	にふい櫻		
91	S101	西トレンチ	甕	B2	13.8	1.5	密	良好	浅黄櫻		
92	S101	南トレンチ	甕			2.8	やや密	やや良好	黄灰	有	
93	S101	南トレンチ	底部			22.2	密	良好	浅黄櫻	外画面赤彩	
94	S101	南トレンチ	舞台	A3	15.8	3	粗	良好	にふい櫻	有	
95	S101	北トレンチ	甕	A1	13.8	1.5	やや密	良好	櫻		
96	S101	東群	甕	A1a	15	2.4	やや粗	不良	灰白		
97	S101	東群	高杯			8	密	良好	にふい櫻		
98	S101	東群	高杯	B2	21.8	0.8	やや粗	やや良好	にふい櫻	有	
99	S101	南群	甕	B4	13.8	0.8	やや密	やや良好	にふい櫻	有	
100	S101	南群	高杯			10.8	密	良好	灰灰		
101	S101	南群	高杯			10.2	やや密	やや良好	にふい櫻		
102	S101	南群	高杯			9	密	良好	にふい櫻		
103	S101	炉周辺	甕	B2	17	1.3	やや粗	やや良好	にふい櫻		
104	S101	炉周辺	甕	B1	15	4.5	密	やや良好	浅黄	有	
105	S101	炉周辺	舞台	A	21.8	2.6	やや密	良好	にふい櫻	外画面赤彩	
106	S101	西排水溝	甕	A2	21		密	やや良好	浅黄櫻		
107	S101	西排水溝	甕	C1a	23	1.5	密	やや良好	灰黄櫻		
108	S101	西排水溝	甕	A5	29.8	1.5	やや粗	良好	にふい櫻		
109	S101	西排水溝	甕	A1b	9.6	5.1	密	やや良好	にふい櫻		
110	S101	西排水溝	鉢	A1	18	1.8	やや密	良好	にふい櫻	外画面赤彩	
111	S101	西排水溝	高杯			9	密	良好	にふい櫻		
112	S101	西排水溝	蓋	A	7.4	12	2.8	密	やや良好	灰黄	有
113	SD02	1群	甕	C2	21.8	1.5	密	やや良好	灰黄	有	
114	SD02	1群	甕	E	7.5	3	4	13	密	不良	
115	SD02	2群	甕	B1	17.8	10	密	良好	にふい櫻	有	
116	SD02	3群	高杯	A	11.6	7.5	密	良好	赤褐		
117	SD02	3群	底部			6.4	やや粗	不良	暗灰黄	有	
118	SD02	4群	底部			9.2	やや粗	不良	にふい櫻		
119	SD02	5群	甕	C2	36.8	0.5	やや密	不良	灰黄	有	
120	SD02	5群	甕	C2	21	3.3	やや粗	やや良好	浅黄	有	
121	SD02	5群	甕	C2	21.4	3	やや密	やや良好	にふい櫻	有	
122	SD02	5群	甕	C2	23.6	2.2	やや粗	やや良好	にふい櫻	有	
123	SD02	5群	甕	A4	23	4.5	密	良好	にふい櫻		
124	SD02	5群	甕	F2			密	やや良好	にふい櫻		
125	SD02	5群	高杯			12	やや粗	良好	灰白	有	
126	SD02	5群	舞台	B	10.6	12	密	良好	灰白		
127	SD02	5群	舞台	B	9.6	3.8	12.2	9.3	密	不良	
128	SD02	6群	舞台	C		12	密	良好	にふい櫻	外画面赤彩	
129	SD02	7群	甕	C2	27		やや粗	やや良好	にふい櫻		
130	SD02	8群	甕	A4	20.6	9	衛	やや良好	にふい櫻		
131	SD02	(4)-(5)層	甕	A1	18	0.5	密	良好	にふい櫻		
132	SD02	サブトレンチ	底部			8	やや密	やや良好	無		
133	SD02	セクション群	甕	B2	14	3	やや密	不良	浅黄		
134	SD02	(4)-(5)層	鉢	C		1	やや粗	不良	浅黄		
135	SD02	(3)層	甕	A	23.6	2	密	やや良好	灰白		
136	SD02	(3)層	甕	C	8	4.5	4	やや密	良好	にふい櫻	
137	SD02	(4)-(5)層	高杯			10.2	やや粗	やや良好	浅黄	外画面赤彩	
138	SD02	(4)-(5)層	手掘ね		5	4.5	4	2.8	粗	不良	
139	SD03	甕	C2	23.4	3.2		やや粗	やや良好	にふい櫻		



図版1 航空写真 (1/10,000)

昭和22年 米軍撮影



1



2



3



4



5

図版2 1.全景（南から） 2.全景（西から） 3.SD02（北東から） 4.SD02北壁断面 5.作業風景



1



2

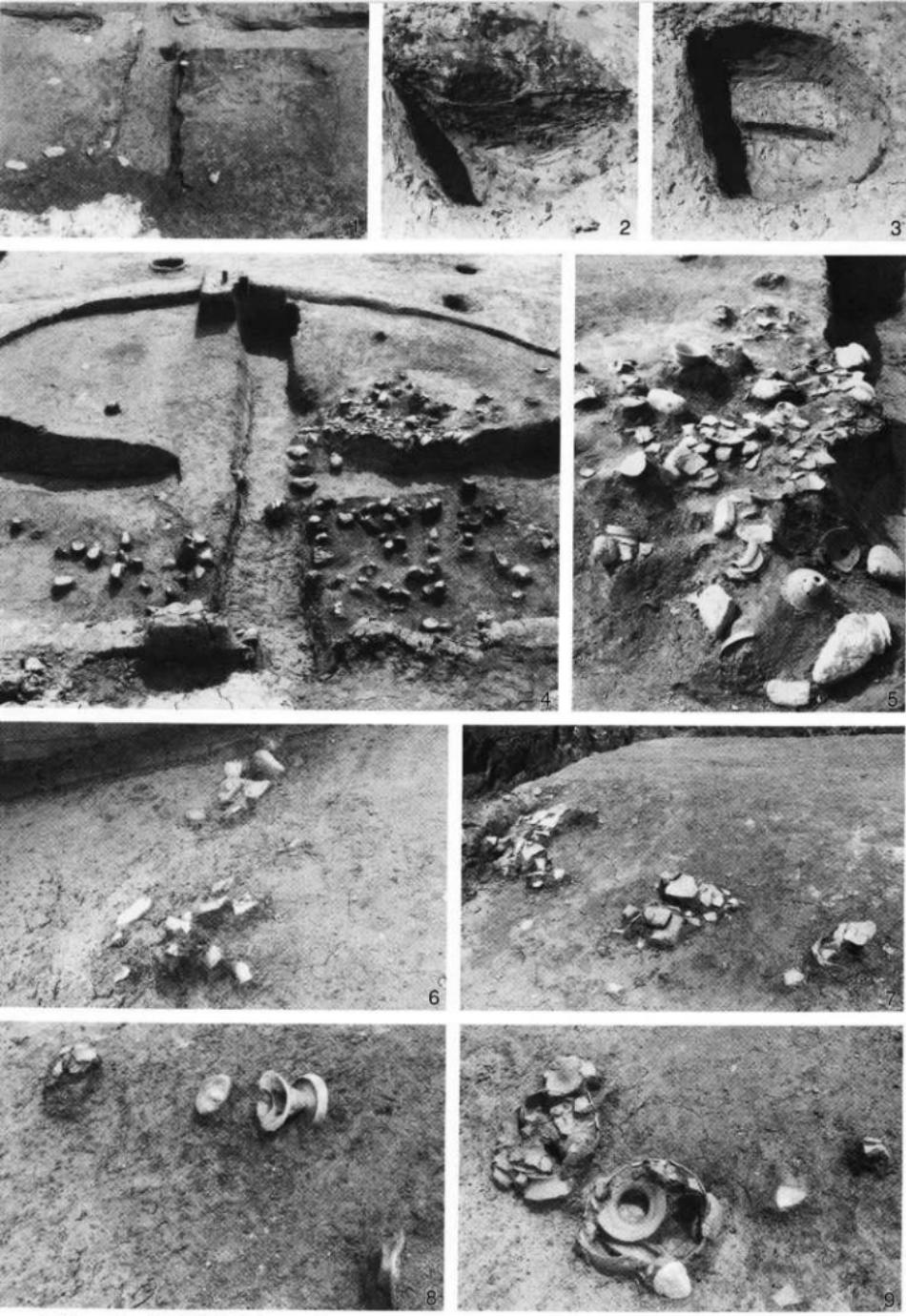


3



4

図版3 1.SI01（南から） 2.SI01（東から） 3.SI01断面（南東から） 4.SI01断面（北東から）



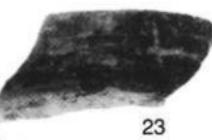
図版4 1.SI01 焼土等検出状況（西から） 2.SI01 炉断面（東から） 3.SI01 炉（東から） 4.SI01 遺物出土状況（西から）
5.SI01 遺物出土状況近景（北から） 6.SD02 1・2群出土状況（南から） 7.SD02 3・4・5群出土状況（西から）
8.SD02 6群出土状況（西から） 9.SD02 7・8群出土状況（西から）



42



44



23



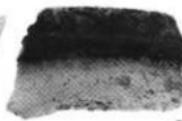
3



109



48



92



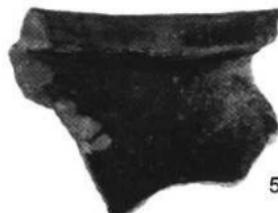
52



25



26



54



8



56



30



41

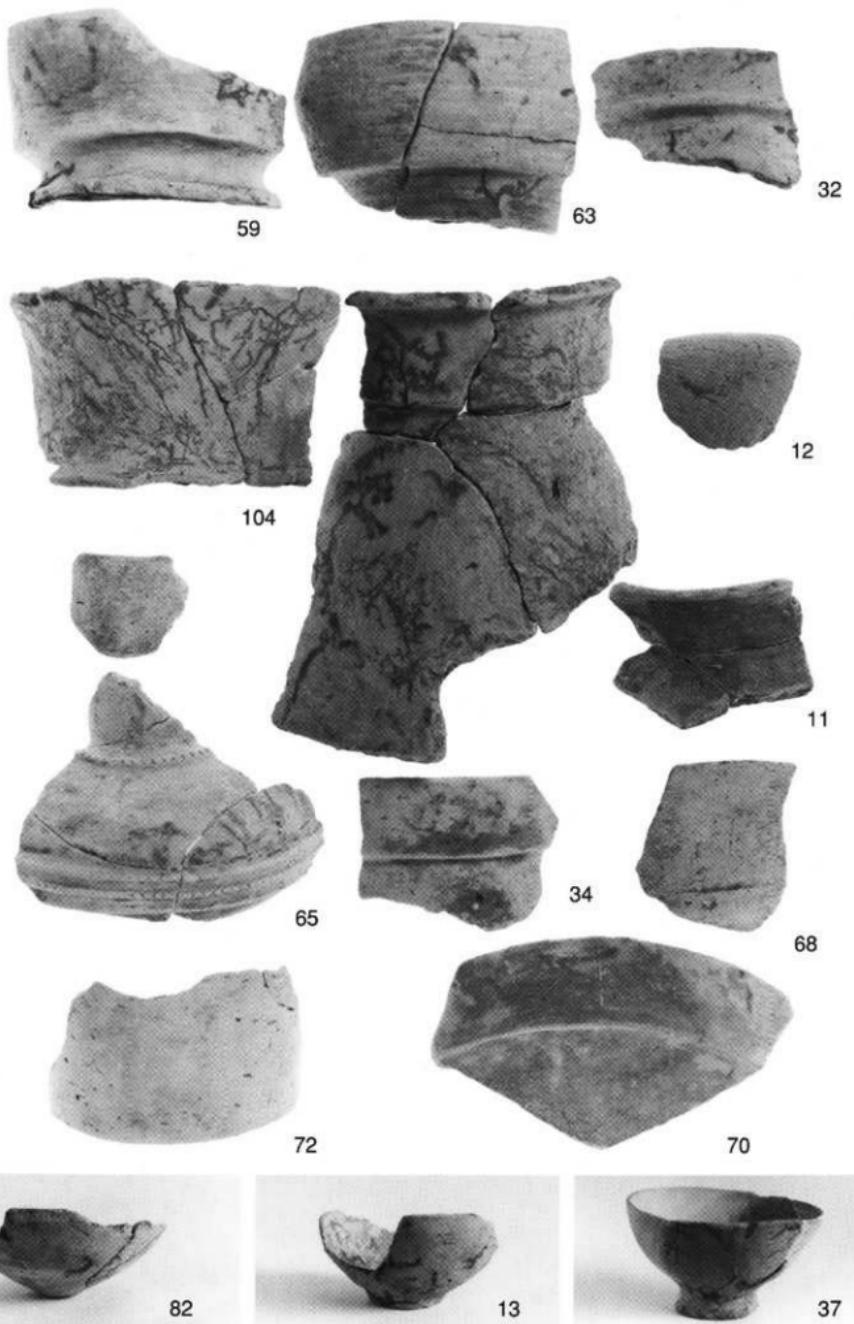


112



91

図版5 出土遺物 (41・91・112は1/3、その他は1/2) ※数字は実測番号



図版6 出土遺物 (13・37・82は1/3、その他は1/2) ※数字は実測番号



28



57



62



18



69



87



75



114



127



128



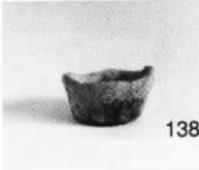
116



123

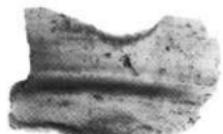


136

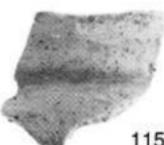


138

図版7 出土遺物 (1/3) ※数字は実測番号



131



115



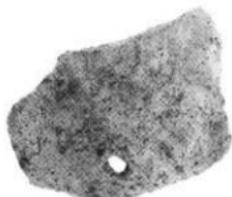
135



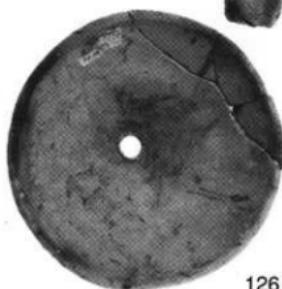
133



124



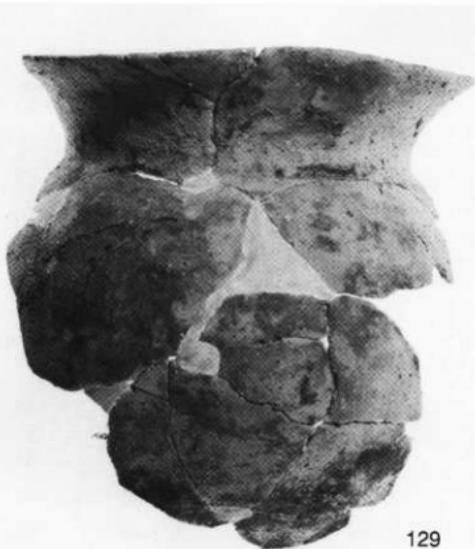
134



126



132



129



130

図版8 出土遺物 (130は1/6、129は1/3、その他は1/2) ※数字は実測番号

報告書抄録

ふりがななんぶいせいきはくつちょうさほうこく								
書名	南部I遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	個人住宅建築に係る埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号								
編集者名	堀内大介							
編集機関	婦中町教育委員会							
所在地	〒939-2798 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL 0764-65-2111							
発行機関	婦中町教育委員会							
所在地	〒939-2798 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL 0764-65-2111							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
なんぶ 南部I遺跡	とやまけんねいぐん 富山県婦負郡 ふちゅうまちやんじ 婦中町熊野道	016362	129	36°37'36"	137°08'35"	970511 ~970811	410m ²	個人住宅建築 に係る事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
南部I遺跡	集落	弥生 終末期	弥生終末期 溝 柱穴 土坑	堅穴住居 1棟	弥生土器 須恵器 珠洲焼 土鍤			

平成10年3月31日発行

編集 婦中町教育委員会
 発行 婦中町教育委員会
 富山県婦負郡婦中町速星754
 印刷 富山スガキ株式会社